

湯島詣

泉鏡花

青空文庫

紅茶会

三両二分

通う神

紀の国屋

段階子

手鞠の友

湯帰り

描ける幻

朝参詣

言語道断

下かた

狂犬源兵衛

半札の円輔

犬張子

胸騒

鶯

白木の箱

灰神楽

星

紅茶会

一

「紅茶の御馳走だ、君、寄宿舎の中だから何にもない、砂糖は各々適宜に入れることにしよう。さあ、神月。」

三人の紅茶を一個々々硝子杯に煎じ出した時、柳沢時一郎はそのすつきりと脊の高い、緊つた制服の姿を籐の椅子の大きなのに、無造作に落していった。

渠は腕袋の美しい片脛を椅子の縁に掛けて、悠然とぶら下げながら、

「籐塚、その砂糖をお客様に出して上げる。」

「おい、」と心安げに答えたのは和尚天窓で、背広を着た柔和な仁体、籐塚某という哲學家。一脚の卓子を囲んで、柳沢と差向いに同じ椅子に掛けていたが、体を捻って、背後へ手を伸すと雑書を納れた本箱の上から、一瓶の角砂糖を取って、これを二人の間に

居る一人の美少年の前に置いた。

「取つて頂くよ。」と優しく会釈する、これが神月と呼ばれた客で、名を梓あずさという同窓の文学士、いづれも歴々の人物である。

梓は柳沢が煎じてくれた紅茶の、薄紅色うすべにいろの透すきとお取る硝子杯コップの小さいのを取つて前に引いたが、いま一人哲学者と肩を並ならべて、手織の綿入こくらに小倉の袴はかまつむぎ、紬の羽織うしろを脱いだのを、紐長ひもく椅子の背後うしろに、裏を翻かえして引懸ひっかけて、片手を袴に入れて、肅然として読書する薄うすひ髯げのあるのを見て、

「何を読んでるんです、」と少しく腰を浮かして、差さ覗しのぞいて聞いた。

「僕、」と応じはしたけれども、急に顔を上げたので誰に返事をするのであるか、自分にも分らないで迂路うろ々々うろするのを柳沢は気軽に引取つて、

「若狭わかさが読んでるのは歴史だよ、国史専修の先生だもの、しばらくの間も研究を怠らない
—

「御勉強です、」といつて神月が点首うなずくと、和尚は、にやにやと笑いながら、その読ん
る書を横目で見た。柳沢は吹出して、

「真面目な挨拶あいさつをする奴やつがあるものか、歴史は歴史だが大変なもんです。無名氏著、岩

見武勇伝だから可いじやあないか。」

「酷く研究をしております、」と哲学者は仰いで飲む。これが聞えたものらしい。若狭は読みながら莞爾とした。

「また何ぞの材料にならないとも限らないだろう。」と梓はその硝子杯を手にした。

柳沢は斜に卓子に凭れて、小刀の柄で紅茶に和した角砂糖を突きながら、

「そりやある、その材料のあることはちようど何だ、篠塚が小まさの浄瑠璃の中から哲理を発見するようなもんだ。」

「馬鹿をいえ。」

梓は傍より、

「しかし君も烏屋の女の言は、時に詩調を帯びると、そういった事があるよ。」

底意なき人達は三人一堂に笑った。

「賑かだね、柳沢、」と窓の下の園生から声を懸けたものがある。

一番窓に近い柳沢は、乱暴に胸を反して振向いたが、硝子越に下を覗いて見て、

「竜田か。」

「誰か来ているかい。」

「根岸の新華族だ、入れ。」と云つて座に直る。

同時に、ひよいと窓の縁に手が懸つた、飛附いて、その以前、器械体操で馴らしたか、身の軽さ、肩を揺り上げて室の中に、まずその瀟洒なる顔を出したのは、竜田、名を若吉というのである。

梓を見て笑を含み、

「堪忍してやれ、神月はもう子爵じゃあない。」といいながら腕組をして外壁に附着いたままに居る。柳沢は椅子をずらして、

「まあ入れ、ちようど可い。今その事に就いて、神月問題というのをはじめた処だ。ちよつとその休憩時間よ。神月が酷く弁論に窮して、き様の来るのを待っていたんだぜ、竜田が居たらばツてそういつてな。」

聞きも果てず、満面に活気を帯び来つた竜田は、翻然と躍込み、二人の間へ衝と立つて、卓子に手を支いたが、解けかかる毛糸の襟巻の端を背後へ撥ねて、

「可し、また例の筆法で苦しめたか、神月君、」
親しげに、

「よく、僕を待つてくれました、もう大丈夫だ、心配をしたもうな。僕何のために学生となつて、法律を研究してると思う、皆親友神月の弁護をするためだね、どうです。」

「どうぞ宜しく、」といつて梓は戯れに頭を下げた。

竜田はその薩摩飛白の羽織の胸紐をぐツとメ《し》め、

「さあ、来い。」

「またやんちゃんが始まるな、」と哲学者は両手で頤を支えて、柔和な顔を仰向けながら、若吉を瞞めて剃立の髻の痕を撫で廻す。

「大概分つてるさ、問題というのは神月が子爵家を去つて、かの夫人に別れて、谷中の寺に籠城して、そして情婦の処へ通うのを攻撃するんだらう。」

「勿論、」と簡単、がちやりと雑具の中へ小刀を投出して、柳沢は大跨に開き直り、

「最初、神月がその夫人との中に感情を害したのは、不幸にも結婚の第一日、すなわち式を挙げた日だ。」

「さよう、」と突込んで応ずる竜田の声は明快である。

「き様も知ってるな、僕も聞いた。そうして成程と思ったが、考えて見ると蓋し神月の方が非なんじゃあないか。」

「何、そんなことがあるものか、新婚旅行に出掛けようとして、上野から汽車に乗込むと、まだ赤羽の声も掛らぬうち、山下の森の中で、光りものがした。神月は——おや、人魂が飛ぶ、——と何心なくいったんだ。谷中は近し、こりや感情だね。そうすると、あの噂々め。」

「竜田窘め、旦那様の前じや、」と哲学者が戯れる。

顧みて、

「失敬。」

「結構、」といったのは、そのいわゆる旦那様梓であった。竜田は勢よく、

「どうだ、小生意気ではないか、——いいえ、星が流れたんです、隕石でございませぬ、

——と云った、そればかりならばまだしも恕すね。」

「神月が人魂だといったのを聞いた時、あいつ愛嬌のない、鼻の隆い、目の強い、源氏物語の精霊のような、玉司子爵夫人童子、語を換えて云えば神月の噂々だ。君、そいつがねその権式高な、寂しい顔に冷かな笑を帯びてさ、文学士を軽蔑したもんだぜ、神月なるもの癩に障らざるを得んじやあないか。」

「可し、婿さんは癩に障ったろう。癩に障ったろうが、また夫人その人の身になって、その時には限らぬが、すべて神月の性質と、行を見た時の夫人の失望を察せんけりや不可。

もつとも余り物質的の名誉を重んずる夫人の性質も極端だが、それだけにまた儕輩に群を抜いて、上流の貴婦人に、師のごとく、姉のごとく、敬い尊ばれている名誉を思え、七歳の年紀から仏蘭西へ行つて先方の学校で育つたんだ。」

「待て、待て、少し待て。」と竜田は掌で卓子を押え、語を遮り、

「まあ待て、先方が七歳の時から仏蘭西で育つたんなら、手前どものは六歳の年紀から仲之町で育つたんです、もつとも唯今は数寄屋町に居りますがね。」

「竜田、」と留めた、梓は恥ずる色があつた。

「可いよ、君、可いから言わしておけ、どうせ皆御存じなんだ。どうです、彼が仏蘭西で、学び、日本で得た、すべての学識と、その子爵たる財産と、家屋と、庭園と、十幾人の奴

隸とだ。その言一句といえども忽にせず、一挙手一投足といえども謹んで、二十七歳の今日まで、旭の昇るがごとくに博し得た名誉とを、悉皆神月に捧げて、その妻となつたのを、恩だというんなら、こつちにだつてその一切に価するものがあるんだよ。」

哲学者は言を挟み、

「見たまえ、また竜田が例の笛と鼓を持出すからな、はははははは。」

「何を失敬な、」と哲学者をちよつと睨んで、

「そうさ、持出すが悪いか。先方じやあ巴里で、麵麩を食つてバイブルを讀んでいた時に、こつちじやあ、雪の朝、顫えてるのを戸外へ突出されて、横笛の稽古をさせられたんだ。

吹込む呼吸が強くなるためだといって抱主が、君、朝御飯も食べさせない、耐るもんか、寒い処を、笛を習つてる中に呼吸が続かぬから氣絶するのが、毎朝のようだ、水を吹かけて生返らして、それから握飯の針のようなのをニツずつ貰つて食べる、帰ると三味線のお温習をして、そのまま下方の稽古に遣られる。直ぐに踊の師匠に打ちのめされるんだ。生疵の絶間もない位、夜はというと座敷を廻り歩いちゃあ、年上の奴に突飛ばされて、仰向けに倒れると見つともないといって頬板を打たれたもんだ、何のためだ、同じ我々同胞の中へ生れて来て、一方は髻を生して馬車に乗つた奴に尊敬される、一方は客

とさえいやあ馬の骨にまで、その笛をもつて、その踊をもつて、勤めるんです、この間に
 処して板挟いたはさみとなつた、神月たるもの、宜しく彼を棄ててこれを救うべしじゃないか。
 どうだね、殊に親も兄弟も叔父叔母もない。ただ手足と、顔と、綾羅錦繡りようらきんしゅうと、三味線
 と冷酒ひやざけと踊とのみあつて存する、あわれな孤児みなしごをどうするんです、ねえ君、そこは男
 子の意地だ。」と若い人は意気すこぶ頗る昂あがつた。

柳沢は冷然として、

「あらず、そういう意地は、鳶とびの者も持つてるじゃあないか。」

四

この折から譬たとえば荒滝をずたずたに切つて落すような、ガツガツという響ひびきがした。この
 音は校舎の奥の方かたより遙はるかに轟とどろき来つて、床下を決して戸外おもてへ抜けたのである。

先刻さつきからわざと笑顔を装いながら、何か澄まないらしい色が見えて、ほとんど茫然ぼんやり
 たかのごとく、柳沢と竜田の論ずる処を聴いていた文学士は、太いたくこれを感じた様子で、
 「何だね、今の音は、」と安からぬ状さまして尋ねた。

柳沢、そのあらぬ方を噴めていて落着かない梓の面を瞻つて、

「忘れたか、神月。」

「何を。」

「今の音を。室を煖める蒸気じやあないか。」

言う時、煉瓦造の高い寄宿舎の二階から一文字に懸けてある鉄の樋が鳴つて、深い溝を一団の湯気が白々と渦き上つた。硝子窓は朦朧として、夕暮の寒さが身に染みるほど室の煖まるのが感じらるる。

柳沢は片手を握つて、長くこれを神月に差向けて卓子の上に置き、

「それだからもう寄宿舎に居た頃の事を君は忘れてしまったのだ。既に幾たびも君が学資に窮して、休学の已むを得ざらんとすることに、常に仏文の手紙が添て、行届いた仕送りがあったではないか。神月、君が俊才有為の士である事は皆が認めていた、けれども、いざとなつて金貨を積んでその業を助けたものは、天下に今の夫人を措いて他にやなからう。

そうすりや恩人でまた唯一の知己といわなければならぬ。夫人の名誉のため、幸福のため、子爵のためというよりも、ただその知己であるというばかりに対しても、君の行は

ちと間違っているじやあないか。」

梓は聞いて物をもいわず差俯向いたにも係らないで、竜田は凜として姿を調べ、

「柳沢、そんなことをいつて僕の居ない時に梓君を苛めるのか、止せ。可いよ、待て、まあ、僕のいうことを、今君のいうごとくんばだ。嗚々殿は仏文の手紙と、若干金の学資とをもつて神月を買ったものだと言わなけりやなりません、そいつあ御免を蒙りたいな、仕送をしたつていくらがもんです。金子なら千か二千じやあないか。利をつけて返すくらいさほど困難なことでもなし、またそのくらいな価で婿に買占められるような、僕の梓君じやあない。それをとまかくも言に應じて玉司家を嗣いだのは、すなわち君のいう、その知遇に感じたからだ。

しかるに、のつけから人魂と流星の事で早くも神月の感情を害ねたのはどういふ訳だい。すべて女学校の教科書が貴婦人に化けたような訳で、まず情話を聞かされると頭痛がして来るといやあ、生理上そういうことのあるう筈はない、といった調子だから耐つた訳のもんじやあない。

鯉は中落が旨くツて、比良目は縁側に限るといやあ、何ですか、そこに一番滋養分がありますか、と仰有るだろう。衛生ずくめだから耐らない。やれ教育だ、それ睡眠時間

だ、もう一分で午砲だ、お昼飯だ。お飯だ。亭主が流行感冒一つ引いても、まつさきに伝染性なりや否やを医師に質すような婦を、貴婦人だつて、学者だつて、美人だつて、年増だつて、女房にしていらるるもんか。」

五

「考えて見たまえな、名誉だの、品性だの、上流の婦人の亀鑑だのと、体の可い名は附けるものの、何がなし見得坊なんじやあないか。」

御覧なさい、だから神月と結婚をした当座に、はじめからの関係を知ってる新聞が報道をすると、その記事の中に、何か夫人がかねて神月に恋をしていたというような意味が書いてあつたといつて、噂々め恐しく憤つて、名誉を蹂躪された、世の中へ顔出しも出来なくてツたようなことを云つて、あたかも神月君が社をして書かしたように当り散らしたというんだ。夫に愛しとるといふことをもつて、大なる恥辱と心得るような見得坊がまたあるかい、怪しからんじやあないか。」と声を鋭くして、竜田はその白面に紅を漲らしたのである。

これを聞いて聞き惚れて、

「しつかりやれ〜。」と哲学者も嬉しそうに応援した。

「そのみならず、数寄屋町と神月君とは神の引合せだと云つても可いな。……」

第一それからして夫人と衝突する基じやあつたらうけれども、神月は先天的、むしろ家庭のか、そうだ、家庭的信心者で、寄宿舎に居る時分から、湯島の天神へ参詣をするのが例で、子爵家に行つてからも毎月欠かさなかつた。去年の夏だ、まだ朝早いのに湯島に参つて、これから鰐口を鳴らそうと思うので、御手洗で清めようとすると、番の小児が水銭をくれろと云つた。懐を探すと神月が懐中物を忘れたね、後に届けるといつても小児だから訳が分らぬ。内気な殿様だから顔を赧くしてまごまごしたツさ。そこへ来合せて水銭を達引いて、それが御縁となりましたのが、唯今の美人です。蝶さんなんだ。」

「解りましたよ。」といつて柳沢は詮方なげに苦笑した。

神月は極悪げに、

「もう可いじゃないか、皆僕が悪いんだから、まあ、柳沢、竜田。」

「いいえ悪かないよ。僕は犬養成、一体婦人が男子に対して貢献するのに、自分の名譽だの、財産だの、芸術だのをもつてして、それで、算盤玉に當つて、差引こうというほど

生意気なことは無い、いわんや、それに恩を被せるに到つては、不届といわざるを得ないな。

しかるに蝶さんに至つては、その今まで為し来たすべての、可いかい。平ツたくこれをいえば苦労だ。その苦労はほとんど天下に大名をなしたものの、堅忍苦耐したくらいなもんだよ、その閱歴えつれきに対する報酬として、ただ、ひたすら、簡単に神月に見捨てられまいということ願つてまた他意なきを如何よ。その上に一意専念、神月のために形造るに到つては、男子すべからくこれがために名と体とを与うべしき、下らない名譽だの、財産だの、徳義だのに、毛一筋も払うもんか。」

「しかし竜田、アダムとイヴあつて以来、世界に男女なんによただ二人ばかりではない。譬たとえば、神月とその美人と、」

「勿論、僕も居る、」

「それから俺おれよ、」

「私も居るわい。」と哲学者は前に屈かがんで、顔を差向けていった。

「加うるに君が居ても差支えない。諸君のような人ばかりなら、幾いくたり人居たつて私は心配も何なんもしないが。」と梓は愁しゆうぜん然ぜんとして差俯さしうつむ向く。

六

「だから神月、君自ら感情を制して、その美人と別れたら可よかろう、」と柳沢は慎重に論じた。

「何、もう子爵家を去つて、寺に下宿したら可いじやあないか。僕はね、爵位と、君があの高慢な鼻かかあ々とを棄てたというので、すべての罪を償あまうて余あまりあるもんだと思う。借金でも何でも遣やつつけつちまえ。癩しやくに障さつたら片かた端っぱしから弾はね飛とせ。一般の風潮で、日本に容いれられなかつたら、二人で海外に旅行するさ。それでも可いけなけりや、天に登るこつた。美しい星が二つ出来るんです。天文学者には分らなくつても、情を解するものには、紫か、緑か、燦さん然ぜんとして衆星の中に異彩を放つのが明かに見出される。」といい放つて、竜田はその若々しい、美しい顔を仰あおむ向けて、腕組をした、毛糸の茶色の襟巻は端がほろほろと解けた。

その背を叩いて、

「江戸ッ児こ！ 相変らず暢のんき気なものだな、本人の神月は、君よりよつほど訳が分つてるよ。

だから心配をするんじゃないか。」と穩おだやかに云いながら柳沢は老実まめまめ々々しく、卓子テイブルの上に両方からつないで下げた電燈の火屋ほやの結むすびめ目を解いたが、堆うずたかい書しよ籍じやくを片手で搔退かひのけると、水指みずさしを取つて、ひらりとその脊せの高い体で、靴のまま卓子の上あかに上つて銅像のごとく突立つたつた。天井はそれよりも遙はるかに高いが、室は狭く、五人を入れて、卓子を真中まんなかに、本箱を四壁に塞ふさいだ上に、戸の入口には下駄箱くだばこが竝ならんで、これに、穿物はきものが脱いであるなり、衣服きものは掛けてあり、外套がいとうは下さがつてる。避よけて通らなければ出られないので、学士はその卓子越の間道を選んだので、余り臨機こそくな働はたらきであつたから、その心を解せず、三人は驚いて四方を囲んで、斉ひとしく高く仰ぎ見た。ために国史専修の学士も、しばらく岩見重太郎に別わかれなければならず余儀なくされた。

柳沢は突立つたつたまま、

「おい、ちよつと退どかないか。」

「何をする、」と哲学者は呆あきれ顔をしてほとんど問題を研究する時のように難しく眉ひそを顰ひそめた。

事も無げに、

「紅茶を入替えよう、湯を取りに行くんだから、」

「こつちへ寄越せ、僕が行こう、」と哲学者も衝と立上る。

「そうか。」といいさま、柳沢はひらりと下りて、身軽に立直った、ぱたりと靴の音。

電燈の球は卓子テーブルの上を這はつたまま、朱を灌そそいだように颯さっと赫あかくなつて、ふツと消えたが、白く明あかるくなつたと思うと、蒼あおい光を放つ！

「星を仰ぐこと、正に、」と竜田若吉は腰を落して頭つむりを卓子の下に入れ、顔を上げて、清すずしい目を睜みはつて、

「こういう風。」

梓はその面羞おもはゆげ気な顔を照らされるのを厭いとうがごとく、椅子を放れて疾とく背後うしろに退のいた。柳沢は長い足を素直に伸ばして、膝を膝に乗せて組違えると同時に仰向けに寝て一杯に肱ひじを張つて、両手で項うなじを抱いだきながら、じツと件の電燈でんとうを瞶みめた。

その時、国史専修の学士は、静しずかに糸を取つて、無心に繫つなぎあわ合あわせて、灯あかりを宙つるに釣つしたと思おもうと、袴はかまの下へ手を入れて、片手で赤本をおさえてみたが、そのまま腰を掛けて、また読みはじめ、岩見重太郎武勇伝。

三両二分

七

「歌んだ、歌んだ、いい塩梅だ。」

空を仰いで立停たちどまったのは、町屋風のわかもの 壮むか 佼けい で、雨の歌んだのを見ると、畳たたんで袂たもとの下に抱え込んでいた羽織ひとゆりを一ひと 揺ゆ、はらりと襟しほを扱くいて手を通した。この男が雨に当てまいと大切たいせつがるのは、単ただにこの羽織ひとゆりばかりではなく、一ひと 品しな 懐なに入れてあるものがある。大きな紙入しりいではない。乳ちち 貫もらいの嬰あかんぼ 児こでもない。すなわち一足おもてうち 表おもて 打うちの駒こま 下まげ 駄たであるが、尾上おのえの使つかいに駈出かけだして来た訳わけではない。これはさる筋ぢんの芸げい 妓いしやから年玉としなに買かって頂たまいたので、すべて、お守まもり扱くいくにしているから、途中で雨あめを啖くちらつたために、汚くすまいと懐な中ちゆうした。本人ほんにんは生白はだしい跣足はだしである。

かかる人は、下町したまちにまず松まつの鮓すし 源げん 次じ 郎らうを措おいて外そとにはない。

それ世よに、鳶とびの者ものの半纏はんてんは、侠い 義ぎにして且那もんの紋もん 着つきは高等こうとうである。しかるに源げん ちゃんちゃんは両りょう 天てん 秤びん、女にょを張はる時ときは半纏はんてんで、願はちまき 卷まき。宗匠しゅうしやうを張はる時ときは紋もん 着つきで卷ま 葛が、色いろと点取てんしゆ 兎と

句が一斉に出来るのであるから、ついこう下駄を懐に入れるような事にもなる。

かえつて説く源ちゃんまちなかは町中の暗がりに羽織を着込んだが、足が汚れていたから下駄は穿はかないで、そのまま懐を揺り固めた。

「可い塩梅だ、畜生。」と、これも何か両面に意味の通ずるようなひとりごと独言をして、また足早に歩き出した。

その面形めんがたのごとく凹しゃくんだ面の、眉毛の薄い、低い鼻に世の中を何と睨にらんだ、ちよつと度のかかつた目金めがねを懸かけている名代なだいの顔が、辻を曲つて、三軒目の焼芋屋あかりの灯てらに照された時、背後うしろから、錆びたずんぐりした声で、

「源じゃあねえか、おい、源坊。」

「誰おもいだい、」と思入おもいのある身振みぶりで、源次郎は振返る。

「俺だ。」

「や、」

「待ちねえ。」

つかつかと近ちかづいた、三尺帯を尻下りに結んで、両提りようさげの蓑たばこいれ入いれをぶらりと、坊主天あ窓たまの親仁おやしが一名。

「頭。」
「」

「おい、」と重く落着いて一ツ頷いた。これは下谷西黒門町に住んで、頭、頭と立てらるる、辰何とか言うのであろう。本名は誰も知らない、何をして暮すのか、ただ遊んで、どことも謂わず一群一群入り込む侠な壮俊に、時々木遣を教えている。

頭は膨らんだ源のその懐をじろりと見て、

「何だ、それは、」

「ええ、」

「下駄じゃあねえか、下駄じゃあねえか、串戯じゃあねえ、何を面睨ったか知らねえが、そいつを懐に入れるだけの隙が有りや、敵の向脛をかッぱらって遁げるゆとりはありそうなもんだぜ。何だい、出会したなあ、犬か、人間か。」

「喧嘩じゃあないんです。」

「辻斬か。」

「冗談をいっっちゃあ可けません。」

頭はわざとらしく呵々と笑って、

「じゃあ、どうしたんだ。」といったが、思う処あるらしく、房りしたその眉を擧めた。

八

源次は何の気も付かない様子で、

「仔細しさいはないんです、喧嘩けんかなんて何も決してそんな訳じゃあないんだけどね、」

「ふむ、」と心ある頭かしらは返事まで物々しい。ちと応うけこたえ答たを仰山うやまにされたので、源次は急に極きまりが悪そう。

「降つて来たもんですから、その何なんですよ、泥ぬいでも芻はねあ上げちやあ、そのね、」と今更いまさらのように懐みまわをして、

「へへへへ、なに詰つまんねえ事ことなんで、」

「それが、」とその時、頭かしらはずつと合点のみごんだ顔かほをして、

「あれだな、評判へいばんの。ついまだ掛違かまちがひいまして手前てまへお目めど通とおりは仕つかまつらねえが、源坊げんぼうが下駄げだと来きちやあ当時なだけ名高なだかえもんだ。むむ、名高なだかえもんだよ。」

「なに詰つまらない。」

「馬鹿ばかあ言いえ。置たたま算みざんより目めの子算こざん用ようを先に覚しえようという今時いまときの芸妓げいしやに、若なにがし干がしか自腹みづらを切きらせたなあ、大おほしたもんだ、どれちよつと見みせねえ、よ、ちよつと挿さませねえか

よ。」

思わず上から手で押えて、

「頭かしら、これですか。」

「その芸妓げいしやの達引たてひいたやつよ。」

「へ、何、下らないことを、」と内々恐悦で、少し含羞はにかむ。

「可いいやな、見せねえ、見せねえ、一番御灯明を奉ることにしようぜ、待ちねえよ。」

と言いい懸けて向直り、左側の焼芋屋の店へ、正面を切つて揺ゆるいで入る。この店は古いもので、取とつきの行燈あんどうに、——おいしくば買かいに来て見よ川越かわごえの、と仮名書かながきして、本場

○焼俵たわらとうすけ藤助——となん。

「父爺とつさんや、」で頭かしらは無造作ことばに言を懸ける。

ぶつぶつ、……ものを読んでいた声はたと止やんで、破行燈やれあんどうの灯の射さす土間の上の一
枚の古障子を明けて、

「誰たれだい。」といった藤兵衛とうべえは、匍はらんばい匍ばいになつて、胸の下に京伝の読本よみほんが一冊、悠々と真鍮環しんちゆうわの目金を取つて、読み懸けた本の上に置きながら、頬杖ほおづえを突いたままで、皺しわをぬつ！

「俺だよ、へんちつとも珍しくねえ。」

「おお、頭。」

「用じやあねえんだ。とつさん少しばかり店を貸してくんねえ、灯あかりが欲しいでの。」

「何か、灯くすツて、その燻くすぶり返つた釣つり洋燈ランプのことかい。」

「そうよ。まあ、」

「御念ないしよにやあ及ふばねえこつた、内証ふみの文ふみでも読よむか、」

「いんや、質おもと札おもとだ、構おもとわつしやるな。寒おもといから閉おもとめてくんな。」

戸外おもとに向おもとつて、

「源坊ほんやり、こつちへ入ほんやりらつし。おい、何ほんやりを茫ほんやり然ほんやり石地蔵ほんやりを抱ほんやりいた風ほんやりで突つ立つつてるんだ、いじ

けるない。」

「頭あ、煖あんなさい、」と竈へつの後つから皸し暖われた声あを懸あける。

「おお、入ほれ黒子ほのしなびたの、この節ほあどんな寸法ほ、いや、寸伯すんぼくか寸伯すんぼくか、ははは。」

「串じょう戯だんじゃあない、ちようど一じょうくべ燻くべた処あだ、暖あけえよ。」

「豪儀ごうぎだな、そいつあ、」とくるりと廻かつた、頭かの法然ほうねん天窓あたまは竈あの陰あに赫て々かして、

「よ、まあこつちへ来すしねえ、松あの鮓すしの兄哥あにい、入あれあつてことよ。」

強いられて、源さん止むことを得ず。

「御免なさい。」

「さあさあ、」と婆さんも七十ばかりだが如才ない。

九

「聞きねえ、婆さん、御前おまえなんざあ上草履で廊下をばたばたの方だったから、情人いろを達引たてひくのに、どうだ、こういうものは気が付くめえ。豪儀なもんだぜ、こら、どうだ素晴らしいもんじゃあねえか。」

かしら とうおもて

頭は籐表とうおもてを打った、繻珍しゅちんの鼻緒で、桐の杵まさという、源次が私生児ひっばなを引放して、

片足打返して差出した。

「ねえ、こら。」と引ひっくり返して鼻緒つかを掴つかんでちよつと捻ひねる。

「どうしたんだね、」と婆さんは膝に手を乗せて蹲うずくまったまま呆れて見ている。

かしら おおげさ
頭は大袈裟おおげさに、

「どうしたどころかい、近頃評判なもんだ。これで五丁町を踏鳴ふみならすんだぜ、お前も知っ

てるだろう、一昨年おととしの仁和加にわかに狒々ひひ退治の武者修行をした大坂家の抱妓かかえな。」

「蝶吉さんかね。」

「うむ、この節あ数寄屋町に居らあ、あの跳はツ返りめ、お先走りで、何でも来いだから、仁和加の時も、一本引ツこ抜いて使うんだからツて、それ痛い目に逢わないだけにして、本式に習いたいというので、お前まへンとこの藤さんに仕込んでもらつたな。」

面小手しなこで竹刀ひつかつを引担ひつかついでお前、稽古着まらだかに、小倉の襦ほお高たかか何かで、朴ほおの木齒ひきずを引摺ひきずつて、ここの内へ通つちや、引けると仲之町を縦横十文字ななに鳴なして歩いた。ここにおわします色男も鳴すことその通り。

それがだな。あのお茶ちやつびいめ、ついこないだまで竹馬に乗つたり、学校の生徒ひつぱに引張ひつぱり出されちやあ田圃たんぼでぶらんこをしていたつけが、どうだい、一番この男とおつちやあがつて、それ、お歳としだま玉たまに内証ないしよだよ、と遣やりやあがつたんだとよ。驚おどろくじやあねえか、この下駄だ。」といつて、また引ひくり返した。頭かしらは竈くわの前に両足りょうあしを拵たばこげながら、片手で拔取ひきとつて銀煙管ぎんぎせるを銜くわえ、腰なる両提りょうさげふらふらと莩たばこを捻ねる。

「おや、」といったきり、婆さんはかねてその蝶吉かたぎというのを知つてるほど、おつちちたと謂いわるる男、すなわちこれなる源次郎のせめてそれだけでも止よして頂きたい、目金を乗

せた鼻の形と、件の下駄と交る交る見競べて解せない顔附。

頭は悠然と煙を吹して、

「何しろ素晴らしいもんじやあねえか、可恐しい。幾らだとか言つたつけな、んんどうだろ
う、うむ、豪儀な。」

言いようが余り業々しいので、取合う気もなかつた婆さんも近々と目を寄せて、

「頭、こりや今の流行かい。」と老いたる事をまじまじと言う。

これを聞くと叱るがごとく、

「これ庫の七戸前も嘗めた口で、何だい、その言い種は、こう源坊、若い中だぜ、年紀
は取るもんじやあねえの。ここに居る婆さんは、これでも仲じやあ葛の葉といつてその昔
は売つたもんだ、ずうつとそれ、」

「止しねえな、見つともない、」と穩に微笑んで目を外した、もう仏に近いのである。

「旧の直で二朱ぐらいか、源坊、幾らだとかいつたつけな、二両二分。」

「頭、三円、」といつて件の鼻を仰向にして澄す。

「ああ、三両二分か、何でも二分という端だけは付いてると聞いたよ。そうか、三両二分
か。ふ、豪儀なもんだ、ちよつとした碁盤より直が張つてら。格子戸で、二間なら一月分

の店賃だ、可恐しい、豪傑な。」と熟々見ながら、うっかりしたか、下駄の肚で吸殻をとん。

源次慌しく、

「頭、

「ほい、これは。」

十

「しかしどうも可恐しい気前だぜ。もつともあの蝶吉といやあ、いつかも客に連れられて中の植半へ行った時、お前、旦那がずツしり重量のある紙入をこれ見よがしに預けるとな、背かない気だから、こんな面倒臭いものは打棄つちまうよ。まさかと思うから、うむ、可いとも大川へ流しツちまえ、といったが災難、仲店で買物をして、お前紙入は、というと、橋の上から打棄つたと言わあ。本当か、とばかりで真蒼になつたとよ。そうだろう、二百円足らず入つてたんだそうだ。

それだものこのくらいな達引はしかねめえ。」という、高がこんな下駄を（しかねめえ

。) というほどの事はあるまいと思うほど、頭が為振を見て、婆さんはこの年紀になつてもその臉の黒い目に、逸疾く仔細があるうと見て取つた。

源次も何となく気がさして、少し不安心になつた、引構で、

「頭、もう沢山だ。」

氣可愧しそうに装つて、もじつきながら、出して取ろうとした手を、外して持更え、

「遠慮をするなツて事よ、何もはにかもうツて年紀じゃあねえ。落語家の言種じゃあねえが、なぜ帰宅が遅いんだツて言われりやあ、奴が留めますもんですから、なんてツたよ
うな度胸があるんじやあねえか。」

「なにまた詰らないことを、」

「それでなくツて、どうしてお前、これが長火鉢の上へ持出されるもんか、この間もお前、脱いだやつを持って上ツて、伝が家の帳場格子の中へ突込んで見せたというぜ。」と風見の鴉がくるりと廻つて、少し北風が吹いて来る。

「え。」

「その時ぶん撲られなかつたのが目つけもんだ。」とずツきり言つて、したたかに氣を替える。

ひやりと応えて、

「何だつてね、」

「婆さん、もう一燻※とやりやどうだ。」

といいながら突込むように煙管を納れた、仕事に懸る身構で、頭は素知らぬ顔をして嘯きながら、揃えて下駄を搔摑めり。

形勢穩ならず、源次は遁足を踏み、這身になって、搔裂くような手つきで、ちよいと出し、ちよいと引き、取戻そうとしては遣損い、目色を変えて、

「頭、何ですから、急ぎますから、」

「跣足で駈出しねえ、跣足で。それが可いや、可恐しく路が悪いぜ。」

また一当当てられて揉手をして、

「穿いて行きますよ、よ、穿くんだから、頭失礼ですが、その。」

「穿かねえでさ、下駄は穿くに極ったもんだ。誰がまあ頂く奴があるもんか。だが、それ懐へ入れる奴は無えとも限らねえ、なあ、源坊。」

「私やちつと何だから、これから少し急ぐんですから、」

「どこへ急ぐんだ。どこへ、」

「ええ、ちつとその、何で。これから発句の会があるんです。」と捨鞭すてむちで歌を読むような見得をいった。

「発句の会、ああ、そうか。源、何、何とか云ったな、その戒かい名みょう、いや俳名よ。待ちねえ、お前なんざあ俳名よりその戒名の方をつけるが可いぜ、おいらが一番下駄の火葬と
いうのを遣やつて、先きへ引導を渡してやろう。」

「ひゃあ、」

「馬鹿め、跣足で失せやあがれ。」

通う神

十一

「おやおや、酷ひどく曇ひどってるなあ、何だかこれじゃあ君を送って来たようだが、神月君。」
竜田は校内の園そのを抜けて、弥生町やよいちようの門を出ようとして空を見たのである。

「一所に散歩をしようと思つたけれど、降りそうだから僕はもう失敬するよ、それじゃあ君、議論は議論だが実際は実際だ、よく考えて 軽 忽かるはずみなことをしたもうな。」と年下の友に熟々つくづく言われて、ただ打 領うちうなずくのは神月であつた。

「それでは。」

「失敬。」と言ひ棄てて、竜田は門から引返した。暗がりの中を詩を唱つたが、低唱してやがて聞えなくなつた。

梓は 徊ていかいして歩を転ずる、向むこうから来て、ぱツたり。

「えッ。」といつて何物か身を開いて退しきつて神月の姿を透すかし、

「よ、先生か。」と冷評ひやかすような調子で言つた。

これは松の鮓すしの源次郎で、蝶吉から頂いた、土付かずといつて可い大事の駒下駄を、芋を焼く竈へつづくに焚つくられた上に、けんつくを啖くらつて面目を失つたが、本人に聞くより一段情無い愛想あいそづか尽しを、頭の口から、しかも意見するごとく言い聞かされ、お穿物はきものという謎まで聞いて、色男堪忍ならず。胸はひツくり返るようだが、むざと胸倉むなぐらを取られると、目の玉が出そうな豪傑かしらの頭あいてを相手には文句も言われず、居耐いたたまらなくなつた処を、煙けぶりに燻いぶされて泥に酔つたように駈出かけだして来たのである、が、自分から顛倒てんとうしていて突当つた人を見

ると、蛇じやの道は蛇へびで、追廻す蝶吉がまた追廻す探索は届いて、顔まで見知越みしりこしの恋の仇あだ。恋に上下の差別がないから仇に上下の差別はない、学士神月梓である。むかつ腹立はらわたちの八ツ当りで、

「ふん、色男も凄じすさまいや、汝うぬが孕はらませた児こを墮おろされりや沢山じやあないか、お政府かみへ知れて見ろ、二人とも、泥かじを嘔かるんだい。知つてていわないのはお慈悲だと思ふが可い。こつちから突当つたらな、そつちからあやまつて、通るこつた。人をつけ、学者もそれで沢山だい、色男万歳だな。」

と影の添うがごとく七八歩、学士に添つて逆ぎやくもどり戻もをして歩いたが、「ざまあ見ろ色男、面つらが見てえや、青いのか、赤いのか、やい、七面鳥の文学士。」と悪たれ口を吐つき棄つてて擦違つて駈出した。学士は歩み悩んだ様子で、ふと足を留めたがさすがに後を見も返らず、取るにも足りない下司げすの雑言と思つたから。

「雨か。」

空を見ると雲低く、ひやりとして頬しほに雫しずく、またばらばらと二ツ三ツ。

「ああ、」と呟つぶやいて、あたかもこの雫しずくに懸かるまいとすることく、かなたこなた身を交かわして歩いた。

最初はただ、ひやししみぞ 廂溝などを幽かすかに打つ音のみであつたが、やがて、かわらやね 瓦屋根に当つてま
たばらばら。

「厭いやだな。」

見る見る繁はげしくなつて、颯さつと鳴り、また途絶え、颯と鳴り、また途絶え途絶えしている
内に、一斉に木の葉こに灌そそぐと見えて静しずかな空は一面に雨の音。

神月は見えなくなつた。

紀の国屋

十二

御待おんまち合あ歌いうた枕まくら。磨すり硝がらす子の瓦がすとう燈とうで朧おぼろの半身せなか、背せなかに御神燈あかりの明を受けて、道行合みちゆきがつ
羽ばの色いろくツきりと鮮あざ明やかに、格子戸あざやかの外あざやかへズツと出ると突いきなり然いきなり柳いの樹きの下もとで、新あたらしい紺くろ
蛇へびの目の傘かさを、肩かたを窄すぼめて両手りょうてで開ひらく。顔かほはその中に隠かくれて見えず、丈たけの好いいすらりとし

た瘦やせぎすな立姿。桃色縮緬ちりめんの扱しご帯おびで、弱腰を固くしめている。白足袋で、黒の爪つまか皮わを深く掛けた小さく高い足駄穿あしだはきで、花崗石の上を小刻こぎきの音、からからと二足三足つむり。頭が軒の下を放れたと思うと、腰を伸のして、打仰いで空を見た。

ここに引着けた腕車くるまが一台。蹴込けこみに腰を掛けて待つていた車夫、我が主来あるきたれりと見て、立直り、急いで美しい母衣ほろを刎はねる。楯棒かじぼうに掛けて地に置いた巳之屋みのやと書いた看板は、新しい光を立てて、蠟紙ろうがみを透すかす骨も一ツ一ツ綺麗きれいである。

「おや、降つちやあいなんだね。」静しずかに蛇の目を窄めて片手に提げた。鼻筋の通つた細ほ面おもての凜りんとした、品の良い横顔がちらりと見えたが、浮上るように身も軽く、引ひき緊しまつた裙すそ捌そばで楯棒を越そうとする。

「こちらへ、」といった車夫は小腰を屈かがめて、紺蛇の目を手早く受取る。その腕車くるまに乗ろうとする時、かちかちかちと木を拍うつて、柳の彼方かなたの黒塀の前に、頬ほ冠かむりをした二人が在あった。

「へい、御鼻ごひいき貞ちどまを一兩名、尾上菊五郎、沢村源之助。」ト声を懸けたので、腕車の蔭かげに立た停とまる。

その時、板塀の上なる二階の障子へ、明るく影が映つたが、端を開けて、廊下へ出た。

植込こすえの梢こすえがくれに、

「あいよ、」という声、捻ひねつた紙包かみづつみが宙を切つて、忍しのびがえし返かえしの釘かすを掠かすめてはたと二人の前に落ちる。

「ええ、鼠ねずみ小紋こもん春着はるぎのしんがた新形しんがた。神田よきちの与吉よきち実じつは鼠ねずみ小僧じろきち次郎じろきち吉きち、傾城けいせい松山しょうざん、」ちよつと句切つて、

「鎌倉山の大小名、和田わだ北ほつじよう条じょうをはじめとして、佐々木、梶原かじわら、千葉、三浦、当時ちろう一いち、藤別当とうべつたうの工藤くどうなどへは二三度へえ入り、まぶな時にやあ千と二千、少ねえ時でも百や二百、仕事をしねえ事あなかつた。その替りにやあ貧乏と、その名の高たかえ曾我そがなどじやあ、盗ぬすんだ金を置いて来た、悪事はするが義理堅よきぢかえ、いわば野暮ぬすな盗ぬす人ひとだが、知らねえ先あともかくも、こういう身性みじようと聞いたならば、お主ぬしやあ厭いやになりやしねえか。」

「何で厭になるものかね、これもみんなその身の好々すきすき、お嬢さんといわれるのが、ちいさい時から私わたしや嫌い、油あぶらで固かためた高たか髻まげより、つぶし島田しまだに結むすいたい願ねがい、御殿ごてん模様の文ぶん字じ入いりより、二の字つな繋つなぎのどてらが着きたく、御新造ごしんぞうさんや奥おくさんと、いわれるよりも内うちの奴やつ内うちの人かといいたさに、親おやをば捨てて勘当くわんたううけ、お前の女房にようぼになつた私わたし、どんな事があるろうとも、何なにで愛想あいそが尽つきようぞいな。」

菊「そんならおぬしやあ盗人と、知つてもやつぱり愛想も尽さず、」源「お前と一所に居たいのは、譬にもいふ似た者夫婦、」菊「夜盗を働く鬼の女房に、」源「枕探しの鬼神とやら、」菊「そういうお主が度胸なら、明日が日ばれて縄目にあい、」源「お上のお仕置受ければとて、」菊「隙行駒の二人連、」源「二本の槍の二世かけて、」菊「離れぬ中の紙幟、」源「果は野末に、」菊「身は捨札、」源「思えば果敢ない、」

「紀之国屋」と思いがけず、暗がりの露地の後の方で、うら若い清しい声。

十三

「ほほほほほほ、」と蓮葉に仇気なく笑つたが、再び、

「紀之国屋！」とあてもなく漫ろに気の冴えた高調子。酔つたと見えて、ふらふらして仮色使の背後に立つて、

「嬉しいねえ、」

といいながら、無遠慮に一ツその一人の肩を叩く。吃驚して黙って呆れる、女は罪もなくまた笑つた。

「ほほほほほ。」

「おや！ お蝶さんだ。」と二階の欄干てすりに凭懸よりかかったのが、思わず威勢よく声を立てた。振仰いで、

「今晚は。」

「神月さん参りました、来たんですよ。」と言ったが障子の中に姿が消えた。

「へい難ありがと有う様でございます。」

度胆どきもを抜かれて、茫然ぼんやりした仮色使は、慌てて見当を失ったか、かえって背後うしろに立ったのに礼をいって、

「さあ、」

「おい。」

踵くびすを廻めぐらすのを見も返らず、女は身を斜ななめにまた踰よ躍ろけて、柳の下を抜けようとした。

門口かどぐちで、

「蝶ちゃん、」

「はい、」

「お気を付けなさいよ。」

「才ちゃんかい。」

「お楽しみだね。」

とひらりと乗る途端に楯棒を取った、腕車の上から、

「さようなら。」

「チャチャチャツチキツチドン。」軽く柳の枝の垂れた尖を細く指で叩いて見せる。

「ふん、」とばかり腕車の上で。見ぬようにしてちよつと見ながら面を背ける、途端に車夫は曳き廻らした。暗夜の小路を看板は、これ流星のごとくに去んぬ。

「チャチャチャツチキツチ、」と低く口吟みながら、格子戸をがらりと開けると、同時に框の障子を開いて、

「よくねえ、」と声を懸けて、逸早く今欄干に立踰れたその女中が出迎えた。帳場の灯と御神燈の影で、ここに美しく照らし出されたのは、下谷数寄屋町大和屋が分の蝶吉である。

着つけは濃いお納戸地に、金で乱菊を織出した縹珍と黒縹子の打合せの帯、滝縹のお召縮緬に勝色のかわり裏、同じ裾を二枚襲ねて、もみじに御所車の模様ある友染に、緋裏を取った対丈襦袢、これに、黒地に桔梗の花を、白で抜いた半襟なり。

洗あら髪いの漬つ島田ぶ、ぼつきりしてややほつれたのに横よこ櫛ぐしで、金脚きんあし五分珠ごぶだまの簪かんざしをわずかに見ゆるまで挿い込んだ、目の涼すずしい、眉まゆの間に雲くものない、年とし紀ぎはまだ若いのに、白おしろ粉い気けなしの口紅くちびるばかり、小肥こぶとりして瘦やせてはおらぬが、幼こい時から、踊おどが自慢こころの姿すがたである。

出迎いえた女中にようぢゆうは前まへへ転のつたと思おもつて慌あわしく身みを開ひいて、

「あれ危あいじやありませんか、」

蝶吉つまさは躓つまずくように駒下駄こまげだを脱ぬいで、俯うつむ向けに蹠よろ躑ぢけ込んで、障子しょうじに打撞ぶかろうとして、肩かたを交かし、退すつて、電燈でんとうを仰あいで、踏ふしめて立たった。ほつという酒さけの息いき、威勢いせいよく笑わつて、

「今晚こんばんは。」

段階子

十四

「蝶さん、奢おごらせますよ。」と帳場から呼んだのは女房である。この待合はその座敷、その器物、その取とり扱あつかい、何につけても結構なものではない。五人一座の二人までは敷かせ座蒲団ざぶとんの模様が違つて、違つた小紋こもんも、唐草も、いづれ勸工場かんこうばものにあらざるなく、杯洗はいせんと海苔のりとお銚子ちょうしが乗つて出るのも、牛屋ぎゅうやのちやぶ台の真中まんなかへ丸く木を填うめてあろうという組織であるのに、お座料がまた必ずしもお安くない。これでは何の取得とりえもないが、ここに注意すべきは女房たるもの、兄とその情人いろのごときもの、且つ女中に至るまで、よく注意して秘密を守り遂げる信用があるので、知れては身分に係わるといつた側が、ちよいちよ懐手てはいりで出入する。

あえてものの三角形が秘密を守るものだという数字の原理はないけれども、歌枕の女房は目の形が三角である。鼻が三角で、口が三角、眉を払つた痕あとがまた三角なりで、頤おこがの細つた頬骨の出た三角を逆さかさまにして顔の輪廓りんかくの中に度を揃ならえて竝ならんでいる。白ツぼい糸織の羽織の裙すそを払つて、金の平打ひらうちの指環ゆびわを嵌はめた手を長火鉢の縁から放し、座蒲団を外してふわりと立つと、むツくりと起きた飼犬が一頭。

真しん鍬ちゆうの首環しんちゆうをがちやがちやと鳴らして、さらさらと畳を渡り、蝶吉の裾すそを掠かすめて、取と着つきの階はし子こ段だんへ、矢のごとく駈かけ上あつた。

この犬、一挙一動よく主婦の意を知る、今その座を立ったのを見ててつきり二階へ上るのだと目敏く先へ立つて飛出したのであるが、段を六ツばかり駈上ると、振返つて猶予つて待つてゐる風情。

三角の主婦は悠々として、

「さあ、お二階へ。」

「お早くいらつしやいな、」と傍からまた女中が促した。

蝶吉は雨の朝、桜の色しつとりとして、瞼に色を染めながら、

「厭ですよ、」とすねるように言つて肩を振つた。

「可いのかい、ちよいとそんなことを言つて、」

「どうせね、」と主従が澄して莞爾して左右から顔を覗くと、

「犬が恐いのよ。」と段階子を見込んで笑う。

主婦はつかつかと前に出て、目をきよろつかして伺つてゐる飼犬を見上げながら、左の手を袖の中へ引込ませて、ちよいと出して、指をさすと電気を感じたようになると廻つて、小犬はちよろちよろと駈け上る。

「可くない！」

というが疾はやいか、段に片足を上げて両手を支く、裾を引いて、ぼったり俯向うつむけに転のめった綺麗な体は、結ゆわえつけられたように階子に寝た。

「危い。」

「あれ、」とけたたましく諸声もろごえに叫ぶのを耳にも入れず、蝶吉はそのまま腕かいなを伸のびして、

「不可いけません、不可いけない、不可いけいよ、」と蹠よろ蹠よろける足を引摺ひきずって、

「畜生わたい、私わたしより先へ行くツツて法があるかい。」

「おいで。」

と膝を軽く拍うって、振返もつたのは梓である。

上あがりぐち口くちの処ところで、くるくる廻まわっていた飼犬は、呼よばれて猶た予めらず衝つと飛込み、いきなり

梓たもとの袂たもとに前足を掛けて、ひよいとその膝に乗かって畏かしこまった。

「不可いッたら！ あれ。」

十五

「失敬な奴ぢや、てツたような訳だわね、不都合だよ、いけすかない、何だ手前は、」ふ

らふらするのを踏こたえて、

「誰に断つたの、畜生、こつちへ来ないかい、打つてやるから、」と袖を翻して、手を挙げたが、そのまま立つてさえ物憂げであった。

「誰が打たれに、……」

梓は俯向いて、犬の天窓をこれ見よがし。

「厭よ、厭よ、私は厭ですよ。そんなもの、打つちやらかしておしまいなさいなねえ。」

「恐いな、どこかの姐さんが、打つちやらかしておしまいなさいなねえッて言ってるよ。」

「焦れツたいねえ。」

梓は笑いながら犬の前足を取つて伸すと、飼犬は口を開けて、目を光らして、わッ！

「悔しがつてるじゃあないか、」と横顔を見せて振向いた。

「なぜそうですよ、言うことをお聞きなさいなね、ええ焦れツたい、」

地踏を踏んでも澄して取合ないので、

「悔しい。」

と横を向いて上口の壁を、構いつけず平手でどんどんと撲り付けて体を揉む。酔つてる処へ激しく動いたので、がつくり膝が抜けて崩折れようとして、わずかにこらへ、搔

撈いむしるように壁に手を縋すがつて、顔を隠して吻ほっという息を吐いた。

「どうしたんですよ、」

階子段を上り上り、主婦おかみは物音を怪あやしんで来たのである。

「おや、おや、」

「言もんく句ばかり言ってるさ、構わないでおくが可いい。なあに汝おまえが先へ来たって何も仔細しさいはな
かろうじやないか。」

「そのことなんですか、まあ、飛んだ難かしいこと、トン！」

わツと吠ほえて前足を立てた、トンは飼犬の名であろう。

「おいで、おいで。さあ、」

「可いいよ、おかみさんこつちへ。」

「でもまた奥様がその何ですから、おほほほほ、」と主婦おかみは三角の口を丸うして笑つて控
える。

「何を、詰つまらない。」

「はい、はい。」

膝に手を垂れ、腰を屈かがめて、戯たわむれに会釈すると、トンはよくその心を得て、前足を下して

尻尾を落した。扁ひらたい犬の鼻と、主婦おかみの低い鼻は、畳を隔てて真直まっすぐに向い合つた。

「おお、可よし、可よし。」二ツばかり頷うなずいて、「それではお邪魔を致しましょうか。」

同時に、ど、ど、ど、ど、ど、ど、どんと床板を踏ふみ鳴ならして、

「厭いや！ 厭いやよ、」と壁の中から唐突だしぬけに声を出した。

主婦おかみは驚おどいて退すきつて、

「まあ、済みません、どうも。」

蝶吉は振乱おまつするように壁に押着けた島田鬻しまだを揺ゆぶつて、

「私わたい、厭いや、厭いやよ。」

「泣ないてるんだよ、おや、ま、ま、どうしたツてここツたろう。驚おどきますねえ、」

と平手を二ツ乳ちの上へあて、目を睜みはつて、

「しよしよのない嬰あか児かちゃんだよ。」

十六

「どうにかしてやっておくれ、面倒だから。」

梓は膝からトンを搔退かひのけて、座も言葉も更あらためて言った。

「さあ、あなた、」とこれもちやんと極きまつて背せなに手を掛けると、訳もなく振払って、

「厭すねです。」

「拗すねるもんじやありません、あの方が来ていらつしやるのに、何が気に入らないで、じ
れてるんですよ、母おつかあ様は知らないよ。」

「といって一つ打ぶつ。」

「痛いよ、」

「嘘うそばツかり、」

「厭すねよ。」

「何が厭すねなんですツてば、よ、焦じれツたい人だ。ええ、」

蝶吉は身みぶるい顫ふるして、

「姐ねえさん、」

「才とつくちゃんは疾とつくに帰かえりました、居いやあしませんよ。さあ、さあ、もう聞きかなきやこうして

、

「あれ。」

蝶吉が身悶みもだえするのを、主婦おかみは構くわず擦すったが、吃驚びつくりして肩を抱いた。

「おや、本当に旦那、本当に泣いてるんでございますよ。堪忍して下さい、堪忍して下さい、悪かつたよ、どうもお前さんただもう嬉しがってるんだろうと思うもんだから、つい知らないで、飛んだことをしたよ。済まなかった、」

極めて後悔し、そのまま首を伸のべて、肩に搦からんで顔を覗のぞくと、真赤まっかになり、可愛かわゆい目を細くして、およそ耐たまらないといった様子で、麗あでやか艶おもてに微笑ほほえんで、

「嬉しい！」とばかりで斜ななめに顔を向けて、主婦おかみの面おもてと、神月の横顔を流ながしめに見ながら蝶吉は莞爾にっこりする。

「畜生。」

小さくなつて、

「擦りツこなしよ、私わたいはもう擦すられると死ぬんですから、酷ひどいわ、一番恐おそいことよ。」と
いいながら澄すまして壁を離はなれ、裾すそを払はつて立直る処を、両手で背後うしろから突飛ばした。

「可憎にくらしいツたらないんだもの。」

壁には薄うすり、呼吸いきの痕あとと、濡れた唇が幻にそのまま残つて、蝶吉の体は源之助きのくにやの肖顔にががが抜出したようになって、主婦おかみの手で座敷の真中まんなかへ突入れられて、足も溜たまらず、横よこだ

僵おれになつたが、男おとこの傍そば。

あたかも好よし、梓すきの膝かまを枕まくらにして、片手ひとてを逆さかに支たいて起た上あろうとしたが、支たえかねて半面はんめんを隠かくして倒たれた。件くだんの御所車ごしよぐるまを染ぞめた友染ともぞめの長襦袢ながじゆばんは、かわり裏うらのしどけない、裳もすそをこぼれて媚なまめかしい。

男おとこは懐なつにした手てを出だしもやらず、眉まゆを顰ひそめて、

「何なにだね、その形なりは。」

「可よくツてよ。」

「可よかあない、かみさんが見みているよ。」

「可いいのよ、ねえ、おかみさん、」

「どうですか。」と極ごくめて慎重しんじゆうに答こたえた。主婦おかみは心こころなく飛と込こむも異いなものなり、そのまま階か子こ段だんへ引退ひっさがるも業腹ごうはらなりで、おめおめと見みせられる。

「不可いけないツたツてしかたがない。」

とその玉たまのごとき手てを畳たたみに、はつたり。

「私わたくしはもう草臥くたびれたんです。」

「重おもい、しようがないな、おい、ちゃんとおしよ、」と揺ゆり落おす勢いきおいで、梓すきは邪よこしま険けんに肩かたを振ふ

った。

十七

「あら、髪がこわれてよ、」と少し横になつて、蝶吉は片手を上げて仰向けに梓の胸を押えて、恍惚して嬉しそうに、

「鬢のほつれは枕の咎よ——あれさ、じつとしていらつしやい。後生だから、」
 「構うもんか、怪しからん。」と男はわざと叱るように言つて、振落そうとする。

蝶吉は目を瞑つて、口をしめ、眉を顰めて、さも切なげに装つた、

「頭痛がしてよ、頭痛が、天窓が痛いのに、酷いことねえ。」

「嘘を吐け、」

「あなた擦つておやんなさいまし、」と主婦は焦れつたそうに足踏をした。

黙つて主婦を見たが、神月は下を向いて、

「止そう、見ツともないから、擦ると最後、きやつきやついてその騒々しいといつたら
ないもの。」

「おや、いつも撥るんだと見えますね、あなたは。」

「え、何、下らない、何を言ってるんだ。まあ、おかみさん、飲むさ、こっちへ来て。」
神月はこれをキツカケに片^{かたひじ}脇^{わき}をちやぶ台に支^ついて、やや所在を得たのである、しかたのなかつた懐中の手は、猪口^{ちよく}を取つて、ちよつと上げて、

「飲むさ。」

「いえ、頂きますまい、そんなことでごまかそうたつて駄目ですよ。まあ、串^{じょうだん}戯^ぢは止して早く拵^{こしら}えさせますから、寝かしてお上げなさい、本当に酔ってるんですよ、全く苦しうだわ。」

主婦^{おかみ}は一切呑み込んだ顔附であつた。神月はそれとはなげに、

「直ぐ帰るんだから、何だよ。」

「ですから誰もあなたにお休みなさいとは申しません。」

と悪く切口^{かき}上で、別にお爛^{かん}を見ようとせず、上^{あがりぐち}口^{くち}に先刻^{さつき}から立っていたままで、

二階を下りようとする、途端にちやぶ台の片隅^{つくば}に蹲^つつて、洋燈^{ランペ}の影で見えなかつたトンは、むツくりと跳^{はねお}起きて首輪の音をさして座敷からツツと出た。

「どこでそんなに酔わされたんだ、よ。」

神月は期せずして主婦おかみを下に去らしめた件の猪口くだんを棄てて、手をその小さな女の胸に置いたのである。

熟じつとして、

「存じません。」

「存じないことがあるものか。」

「解わからなくツてよ。」

といつて清すずしい目をぱつちりと開いた。蝶吉は、男の、凜りんとした品の可いい、取つて二十五の少わかい顔を、しげしげと嬉しそうに瞞みづめている。

「それじゃあ、酔わされたんだとはいうまいから、どこで飲んで来た、それなら知つてるだろう。」

「あなた、また叱ろうと思つて、厭いやよ。そんな真面目まじめな顔をしていらしちやあ……。だつて少しばかりなんですもの、」といい懸けて目を外そとし、枕まくらにしている神月の膝ひざを着物の上から撮つまんだが、固つくちやんとしているの、指ゆび尖さきにかからない、絹布しほに皺しわを拵なえようと、抓つかるでもなく、撫なでるでもなく、爪つまさぐつて莞爾にっこりして、

「可いいじゃありませんかねえ、少しばかり、偶たまなんですもの、大丈夫だいじょうぶさ。」

十八

「大丈夫？　そうさ、また大丈夫でなくったって誰が何というものか、酒はお前さんが飲むんじやあないか、そしてお前さんが酔ったんだらう、芸者の蝶吉が酒に酔ったって、私にやあ甘くも辛くもない、何も難しいことはありません。」と向へ押遣ると、銚子が袴を着けたままで、盤の上をするすると歩いた。杯は一個横になつて、飲みさしが流れていた。あえてこれを細く断る必要はないけれども、ちようどその銚子が歩いた時、蝶吉が起きたからのことである。

梓の羽織の袖に、鬚の摺合うばかり附着いて横坐になつたが、鹿爪らしく膝に手を置き、近々と顔を差寄せて、

「おや、異う仰有いますね、異なことを。何ですツて、」

蝶吉は詰め寄りそうにしていた、梓は今迄に手許へ引いて、

「まずお酌でもして頂こうかね、お爛さましじやありますけれども、」

「ふん、」と言つたばかりで澄して見ている。

「いかがでございましょう、頂く訳には参りませんか、どうです、蝶さん、ここには是非一番君のお酌をという、厄介な、心懸こころがけの悪いのが出来上ったんですが、悪うございませぬか。」

「はあ、随分宜よろしゅうございましょう。」

梓ちよくは猪口を拾って、杯洗の水を切り、

「結構な訳ね、宜しければ、どうぞこれへ、」

「おやおや唯ただいま、今内の人におことづけをなさいました、蝶吉ねえ姐さんに酌をして欲しいと仰有わたくしいますのは、ちよいとお前さんかい。」

「私でございませぬ。」

「おお、心懸こころがけの可いい奴やつじや、宜よろしい。さあぐつとお飲み。余り酔わないうように致せ、これ、女房かみさんがまた心配をするそうじやからな。」

「畏かしこまりましたが、一向さようなものはございませぬ。」

「なくても今に出来ます。その心懸なればきつと出来るから、さよう心得るじやぞ。」

「はい。」

「一体、容ようす子が可よくツて、優よしくツて、それで悪くまた学問とかがお出来遊ばしやあがつ

て、知った顔をしないでな、若殿様のようで、世話に碎けていて、仇気なくって可愛らしくツて、気が置けなくツて、その癖頼母たのもしい、き様は女おんな殺ころしじや。よくない奴じやぞ。方々の女の子が皆で騒ぎやあがるで、可哀かわいそうに蝶吉が氣ばかり揉もんでいるわえ、なぜそうじやろかな。不心得な奴じや、その分には差置かれぬぞ。」と覚束おぼつかなげに巡査こわいの声色ろを佳い声で使いながら、打合せの帯の乳の下の膨らんだ中から、一面の懐中鏡を取出して、顔を見て、ほつれ毛を搔かき上げた。その櫛くしを取直して、鉛筆なぞらに擬えて、

「コヤコヤ、いつかも蝶吉がお花札はなを引いた時のように警察の帳面につけておく。住所、姓名をちやんと申せ、偽るとためにならぬぞ。コヤ、」と一生懸命わらいに笑を忍んで、細ほつそりした頬を膨らしながら、唇を結んで真面目である。最初はじめは何か取合あって遊ぶつもり意いだった梓あもあんまりだから、

「何だ、馬鹿々々しい。」

「コヤ、巡査に向つて何だ、馬鹿々々しい、き様は失敬な奴じやな。」

「可加減いかげんにしておけよ、面倒臭い。」

蝶吉はちよつと膝つを突つついて、

「よう、巡査おまわりごとをしようよ、よう、可笑おかしくツてよ。」

梓は叱る訳にもゆかず、苦笑一番して、
 「暢のんき気なもんです。」

手鞠の友

十九

神月梓は学士である。同窓の朋友の間にも、その温雅なる風采ふうさいと、秀麗なる容貌ようぼうと、学識の豊富なるをもつて聞えた、俊才で、且つ人魂ひとたまと、流星と、意見の衝突以来、不快の念を抱いだいて、頃ちかごろ日夫人の許もとを辞して、谷中の寺に隠れたけれども、梓は子爵家の婿君である。すなわち華族の殿様であつて見れば、世に処してかかる待合などには出入ではいりすべき身分ではない。

もつとも地位あり、名声ある人の芸妓遊げいしやあそびをせぬという限かぎりはない、立派に客たる品位を保つて、内に疾はやましい処がなければ、まだしも世間は大目に見ようが、梓はさる身分で

ありながら、一待合の女房を見て、これを（おかみさん）といつて自ら謙り、相手の芸妓を捕えて、おいとも、こらともいうのではない、お蝶さん、おまえさんは、という調子たるや、蓋し自ら卑うしたるものだと謂わざるを得ぬ。

少くとも青年の佳士、衣冠正しい文学士が、譬えば二人対向いの時、人知れずであるうとも独省みて恥辱でないことはない。

しかるに、梓は旧仙台の生で、土地の塗物師の子であつたが、豊なる家計の下に育つたものではなかつた。使に行く問屋の旦那にも、内へ注文に来る余所の小父さんにも、隣家の士官の奥方にも、向の質屋の番頭にも、いつも、可愛がられてはいたけれども、未だ敬礼された覚がないので、人に逢えばまず此方から挨拶をするもののように、余儀なくされて育つたのである。

加うるに、その母親というのは、その始江戸から住替えて来た有名な芸妓だつた、のみならず、これを使って同じ仙台の土地へ後から出て来た母の妹夫婦も、また甚だ不遇で、年も措かず夫が亡なつたので活計を失うと、女の子が二人あつたのが、姉妹揃つて苦界に身を沈た。前世の因縁とでもいうのか、父の姉の子が一人、梓より年上であつたのが、それもまた同じ勤の止むを得ぬ境遇であつたから、中の好い従姉妹が三人、年紀の姉なる

と、妹なると、皆お嬢様ではおらず、女房にもならず、奥様にはもとよりなり、揃つて世の中から畜生呼わりをされる身で。

母親は若死した、やがて父親も亡つた。その遺言に因れば、梓の実の姉が一人ある。内の都合で、生れると直ぐ音信不通の約束で他へ養女に遣わしたのが、年を経て風の便に聞くと、それも一家流転して、同じく、左袂を取る身になったという。野辺の送が済んで、七々四十九日というのに、自ら恥じて、それと知りつつ今まで遂に音信なかつた姉者人、その頃一豪商の愛妾になつていたのが尋ねて来て、その小使と、従姉妹三人が竜の腮を探るような思をして工面をしてくれた若干金とで、ようよう後弔も出来たくらい、梓の家は窮していた。

もつとも小学を卒え、中学に入つて、ちようど高等学校に入つていたその学資は、父が膏血を絞つたものであることはいうまでもないが、従姉妹達が銘々、自分の境遇を悲しむ余りに、一門の中からせめて一人、梓さんが男だからと、石筆を持つて来る、算盤を買つて来る。本の葉に美しいといつて、花簪の房を仕送れば、小な洋服が似合うから一所に写真を取ろうといつて、姉に叱られる可愛いのがあり。

二十

学校の帰途、驟雨に逢えば、四辻から、紺蛇の目で左褻というのが出て来て、相合で手を曳いて帰るので、八ツ九ツ時分、梓は酷く男の友人に疎じられた。人は皆竹

馬の友を持つて居るけれども、梓はかえつて手鞠、追羽子の友を持つていたのである。

父親が亡つて、姉が初めて訪寄つたのが機会で、梓は高等学校の業を卒えて上京した、学資は姉の手から——その旦那の懐中から——出たのであるが、学年中途にして志未だ成らず、年紀はようよう梓より二ツ上の姉が、両親の後を追つて、清く且つ美しい一輪の椿、床の花瓶をほつりと落ちた。

最後にその三人の従姉妹が、頭のもの、帯一本、指環を一ツ売つたという、二十円余二月足らずの学資を達引いてくれたまでで、あわれ一人は目を煩い、一人は気が狂つたようになり、いま一人は人に連れられて北海道に渡つたという、音信があつて、それなりけり。という境遇であつたので、幼少の折から、紅の曙、緑の暮、花の楼、柳の小家に出入して、遊里に馴れていたのであるが、可懐しく尋ね寄り、用あつて音信れた、往くさきぎきは、残らず抱であり、分であり、いずれも主人持のことであるから、勢已むことを得ず、

帳場に片膝立てている女房に挨拶をせねばならず、奥に搔卷かいまきを懸けて昼寝をしている、亭主あたまたに天窓あたまを下げねばならない。

単にそう云えば梓ひじが酷ひどく意気地いくじのないように聞えるけれども、人の召使は我が召使ではない、玄関番の書生が、来客の履くつを取って送迎するのを見て、来客たるもの、自家を尊大にして己おのれに従うものだと思ふのは失敬であろう。履を取るはすなわち主公に使うるの道であえて来客に対する礼ではないから。

芸妓げいしやも自家これに客となつて、祝儀はすずを発奮ぎよくみ、玉を附けて、弾け、飲め、唄え、酌をせよ、と命令を奉ぜしめた時ばかり、世の賤業を営むものとおとしめて宜よろしいけれども、臂鉄砲ひじでつぽうに癩癩かんしやく玉だまを込めた、ドンを啖くらい、鳩玉はとまめで引退るに當つてや、客たるものは商となく、工となく、武となく、文となく、戦たたかいに敗けたものと謂いわなければならぬ、いわんや、さつさと貰あわられてのツけから、対手あいてにされざるものにおいてをや。

忘八ぼうはちの亭主、待合おかみの女房といえども、己遊客おのれとなつてこれが敬礼を受ける場合でなく、一個人としてここに訪とい寄れば会釈あをしなければならぬ数すうで。

たとい、売淫婦といえどもその妹いもたるものは、淑女であつても渠かれは姉さんである。たと山賊といえども、山路におのれ踏迷ふみまよった時寸毫すんごうの害も加えられずして、かえつて此こ

方なたより道を聞いて、麓ふもとに下りることを得たりとせんか、渠は恩人である。世を害するものなりといつて訴人に及ぶは情において忍ばるる処ではあるまい。しかるにこれを訴人して、後にざまあ見ろをくらつて、のり血べにになつて悶もがくのは、芝居でも名題の買つて出ぬ役やくまわ廻りであらう。

母をはじめ、姉、従姉妹、幼時における梓が七情を支配したものは、皆苦勞人であつた。あえてこれ天下あへてこれ天下に憚はばかる処なしといえども、しかれども、数すうの奇なるもの、顧かえりれば無慙むざんな境遇。

湯帰り

二十一

梓が上京して後東京の地において可懐なつかしいのは湯島であつた。湯島もその見晴みはらしの鉄の欄干かに凭よつて、升形の家が取囲んでゐる天神下の一廓かくを詠ながめるのが最も多く可懐なつかしかつた。

可懐しさもまるで過世すくせの夢をここに繰返すようなもので、あえて、ここで何等のことを仕出しいだしたことはないが、天神下はその母親の生れた処だということについてである。

されば故郷を去つて独り寄宿舎に居る、内気な、世馴なれない、心弱い、美少年は、その界限かいがいに古びた廂ひさしを見ては、母親の住んだ家ではあるまいかと思ひ、宮の鰐わにぐち口に縋すがつては、十七八であつた時の母の手が、これに触れたのであらうと思ひ、左側に竝ならんだ意気な二階家の欄干、紅裏もみうらの着物が干してある時、夜は殊に障子に鏡かがみ立たの影の映る時、いつもいつも心嬉しく姿寂しく、哀れさ、床しさが身に染みて、立去りあえずたたずイむのが習ならいであつたが、恋しさも慕したわしさも、ただ青海あおうみの空の雲の形を見るように漠然とした、幻に過ぎなかつた。しかるにある時、それを形に現あらわして、梓の感情を支配する、すなわち、床しい、懐しい念のすべてをもつて注ぐべき本尊たど、譬たとえば婦人が信仰の目じるしに、優しい、尊い、気高い、端嚴たんげん微妙びみょうなる大悲觀世音の御姿みすがたを持つてゐるようなものが出来たのである。

ちやうど玉司子爵の令嬢いまは梓の夫人たる童子から、まだ仏文の手紙の来ない先、姉が死んで、従姉妹いとこが離散して、学資が途切れたので、休学して、しばらく寄宿舎しりぞを退しりぞいた間、夫婦で長屋を借りて世帯を持つていたいささかの知己しるべの処に世話になつたが、その主あ

人また大の貧窮で店立を命ぜられて、一日九尺二間の城を明渡すの止むを得ざることに立至った。その日も梓は例のごとく、不遇の身を湯島の境内に彷徨わせて、鉄欄干に遺瀨のう時を消して暮方に家に帰ろうとする、途中で会った友達夫婦が、一台の荷車の両脇に附添って、妻恋の下通を向うから曳かせて来て、

(天神下の××番地へ引越す、後から来たまえ。)

(神月さん、その時この車に附けあまったがらくたを隣家へ預けて来たんですから、車を雇って持つて来て下さいな。)

と暢気なもので別れて行った。意を了して、その頃同朋町に店借をしていた長屋に引返して、残りの荷物を纏めたが、自分の本箱やら、机やら、二人乗には積み切れないで、引越車をまた一輛。

天神下までは路も近し、洋燈を手にして宰領して、男坂の裏を抜けて、目的の処へ行く

と、さあ知れない。

向うが言い違えたか、こつちで間違えたか、覚えた番地を差配にまでかかって尋ねたが、皆くれ分らず、荷車について、ぐるぐる廻ってる、日は暮れる、暗くなる、二三時もかかったので、間が抜けてるじやありませんか、と曳子はぶつぶつ叱言をいう。引返した処

で寝る家もない場合。梓一人が迷惑して困じ切っている処を、灯がないと、交番で咎められたが、提灯の用意はなし、お前さん。その手に持つてる洋燈をお点けなさい、と曳子は中ツ肚だから口の裡で、幾たびも、ヘン間拔だな。

二十二

さるほどに神月梓は、暗夜、町中に灯した洋燈を持って、荷車の前に立たせられて、天神下をかしこっこ、角の酒屋では伺います、葺屋の店でも少々、米屋の窓でもちよいとものを。いずれも知らない、存じませんな、を言わるるたび、背後から、噛着くように叱言をくつて、ほとんど耐え切れなくなると、雨が降出した。

梓は蒼くなるまでに、果は気を苛つて、額がつつぱると思うほどな癩癩筋、一体大人しく、人に逆らわず、争わないだけ、いつもは殺しておく虫があるのでむらむらと、来た。それに気が小さいから、取詰めて、持つてる洋燈をこの荷車に叩きつけよう、そして粉微塵に砕けたら、石油に火が移つてめらめらと燃えて無くなるであろうとまで思った。これはしかねない少年であつた。

その時、黒縮緬くろちりめんの一ツ紋。お召めしの平生着ふだんぎに桃色の巻つけ帯まき、衣紋えもんゆるやかにぞろりと
して、中ぐりの駒下駄こまくだ、高いので丈せいもすらりと見え、洗あら髪がみで、濡ぬ手拭てぬぐい、紅絹もみの糠ぬかぶ
袋くろを口に銜くわえて、鬢びんの毛を搔かきあげながら、滝の湯とある、女の戸を、からりと出たのは、
蝶吉で、仲之町からどこにか住替えようとして、しばらくこの近所にある知己ちかづきの口入宿くちいれやど
に遊んでいた。年紀とし十七の夏のはじめ、春の名残なごりに降ろうとする大雨の前で、戸外おもては真まっく
暗らな出会頭であいがしら。蝙蝠こうもりが一羽ひらひらと地を低ひくう飛んだと見た、早や戸を閉めた縄なわ暖ぬ
簾もを洩れて二筋三筋戸外おもてにさす灯の色も沈んだ米屋を背後うしろに、此方こなたを向いて悄しよんぼり然洋
燈たを手にしてイんでる一個白面の少年を見たのである。梓その時はその美しい眉まゆも逆釣さかづッ
ていたであろう。まさに洋燈を取つて車の台なげうたに抛なむとする、眈めじりの下さつたのは蝮まむしより嫌きらな江
戸こツ児肌ひとみしり。人見知ひとみしりをせず、年は若し、かけかまいのない女であるから、癩癩かさが高ぶつて
血さかも逆さらんとする、若い品の良いいを見て嬉たしくつて耐たまらず、様子さまを悟さとつて声を懸かけた。
(ちよいとどこへいらつしやるの、)

一幅ひとばの赤い灯ともしが、暗夜かくを劃ひくして閃ひらめなかに、がらくたの堆うずたかい荷車かと、曳子ひきこの黒い姿を
従したがえて立たつていたのが、洋燈やうていを持ったまま前へ出て、
(家うちを探たしてゐるんです。)と内心うちに激うしたれば声も鋭うく答こへたのである。

蝶吉は莞爾にこにこ々々しながら、愛想よく仔細しさいを尋ねて、

(そう、今日お引越ひっこしなすつたの、何でしょう、兵児帯へこおびをして、前垂まえだれを懸けた、肥ふとった旦那と、襟のかかった素袷すあわせで、器量いきりょうの可いかみさんとが居る内でしょう。そうなの、それじゃあついでそこなんだわ。) といつて、濡手拭ぬてぎで指ゆびさしをしてくれた。蝶吉はその長屋の表お通もてどおりの口入宿に居たのであつた。

この口入宿の隣家となりは、小さな塩煎餅屋しおせんべいやで、合角あいかどの花簪はなかんざしを内職にする表長屋との間に露地がある。そこを入ると突つきあたり当あが黒板塀。ついて右へ廻ると粹いきな格子戸の内に御神燈みとほを釣つるしたのがあるが、あらず、左へ向うと、いきなり縁側えんがわになつて、奥の石垣いしきりが見透みとおされる板屋根の小家こいえがある、そこが引越先であつた。

この一廓は、柳にかくれ、松が枝えに隔へてられ、大屋根の陰になり、建たて連つらなる二階家に遮かざられて、男坂の上からも見え、矢場が取払みおろわれて後、鉄欄干から瞰みおろ下しても、直ぐ目の下であるのに、一棟の屋根も見えない、天神下のかくれ里。

描ける幻

二十三

さて件の花簪屋と煎餅屋との間の露地口の木戸は、おしめ、古下駄等、汚物洗うべからずの総井戸と一般、差配様お取極で、紙屑拾不可入、午後十時堅くべ切。梓が引越してから五日目の夜、十時を過ぎて帰ることがあつた。木戸へ来ると、鍵がかかつていた。向うの湯屋では板の間を磨る音、男坂下なる心城院の門も閉つて、柳の影も暗く、あたりは寝て、切通の方には矢声高く、腕車の疾く軋るのが聞えたが、重宝なもので、煎餅屋の店から裏長屋へ抜けられるのだから、木戸を閉切つたあととはこれが例、女房が見つけて、ちやんと心得、

(書生さんの旦那、お穿物をお提げなすつて、こちらから。)と言つてくれた。

極も悪し、面を背けて店口から奥へ抜けようとすると、同く駒下駄を手に提げて裏口からはらりと入つて来た、前日の美人とぽつたり逢つた。袖も摺合うばかり敷居で行違う。振の明から溢れる緋の長襦袢が梓の手にちらちらと搦むばかり、颯とする留南木の薫。顔を見合せて、

(失礼、)

(……………)

(ちとお遊あそびにいらつしやいな。)と言ひ棄てて、それでもまだ答をしない中に、早やばたばたと戸外おもてへ出たが、

(おばさん、お邪魔様、)と言ひさまに口入宿の表の戸がらがら、鈴を鳴らして入った。蝶吉は今夜裏なる常盤津とこぎわすの師匠もとの許もとに遊びに行つた帰かえりであつた。

梓は幾ほどもなく仏文の手紙を得て、この隠家かくれがを出て、再び寄宿舎の卓子テイブルにパイロンの詩集を繙ひもといて肅然とする身になつたが、もとより可懐なつかしい天神下はますます床しいものと成り増まさつたのである。

今こそあれ、件くだんの美人を梓は誰なりと知る由なく、ただかの時と、その時と再度のみ。それもつくづく見たのではないから、年紀としのほども顔かお立たてもよくは分らなかつたけれども、ただ彼が風俗は一目見て素人でないことを知つた。宛えんたるこの大都の芸妓げいしやの風俗、梓はぞつとしたのである。

しかも窮苦きつわ極まりなきに際して家を教えられたのであるから、事は小なりといえども梓は大なる恩人のごとくに感じた。感ずるあまり、梓は亡母なきが仮あに姿あを現あらわして自分を救つたの

であろうと思つた。あえてここに更めていう、梓の母は芸妓であつた。そして天神下はその生れた処である。

幾多の星霜を経てはいるけれども、かしこの柳、ここの松、湯屋も古くからあるというし、寺の門前のは今もあたりの女の子が、打集うては遊んでいる、鞠唄も唄うている、ひさし廂、軒、土の色も有の儘。ままこれがむかし母親の住んだ家ではないかと心の迷うのも慕わしさの余、あまりしばらく住んでいた、破屋の太く古いのにつけても、もしやそれかと、梓はあたかも幻というものを画に描いて、目にこれを見るような思がした。それこれの聯想から、誰とも知らず、その頃の蝶吉を、母の佛に肖たように思つてた折から、煎餅屋の店で
行違つた時も、母があたかもその年紀で、その頃、同じことを、ここでして、こうして育つたのであろうと、あたかも前世紀の活きた映画に接するがごとく感じたのである。

朝参詣

梓が大学の業を卒おえて、仏文の手紙の姫、年紀としは二ツ上の童子に迎えられて、子爵の家を嗣つぐ頃には、地主の交替か、家主の都合か、かの隠家の木戸は釘くぎづけ附しめきりのメ切きりとなつて、古家の俤おもかげも俤おぼれなくなつた。構かまえ外そとを廻まわつて見ると、今までとは方面の違ちがつた町の側、酒屋の蔵ぐらの廂ひあわい合ひとすじに一条仄ほの暗くい露地かまが開あかれた。大方もと旧もとの借家へ通とずることが出来るのであろうと思おもうばかり、いうまでもなく、先に世話ごぜんになつた友人夫婦は、疾とくに引越ゆきして行方ゆき知れず、用もない処、殊とに、向合むかつて御膳ごぜんを食べる、窓から手を出して、醬油おしたじを借りようという狭い露地内へ、紋もん着つきの羽織うでうそうそ入いられたものではない。入いつて見られず、伺かうて分わらなくなると、ますます可な懐つかしさは増まつたけれども、これまでと違ちがつて玉司子爵たまじしやく梓氏しとなつてからは、邸やしきを出入しゆの送迎そうおうも仰々ゆきしく、往來ゆきの人の目にも着つく、湯島のそぞろ歩行あるきは次第あに日ひを措おき、週しゅうを隔へつるようになったが、遠とほいが花の香かで、床とこしさはまた一ひと入し入お。

梓はその感情をもつて、その土地で、しかも湯島詣もうであしたの朝あした、御手洗みたらしの前まえで、桔梗ききょう連れんの、若葉わかしと、幟のぼりと、杜ほととぎす鵲ほととぎすの句く合あの掛行燈かけあんどう。雲くもが切きれて、梢こすえに残月ざんげつの墨すみ絵えの新あしい、曙あけぼのに、蝶吉てつきちに再会さいかいしたのである。

今日しも寄宿舎の紅茶会で、竜田若吉が言ったごとく、梓はその時もある意味をもつて、蝶吉に助けられた。

些細なことだけれども、一体貧窮刻苦の中に育った人の、文学士で玉司子爵夫人の恋婿でありながら、ちつとも小遣などは気にしないので、持って来たとも覚え、忘れて来たとも知らず、落したのか、紙入というものを持合せず、水を注ぎようとして干杓を取る

と、
(水錢をおくんな。)と豆を装つてならべてある土器の蔭から、丸々ツちい、幼い顔を出されて、懐を探るとない。袂に手を入れるとない。左にもない、帯の間にはもとよりない。

思わず、どぎまぎして呟いた。

(どうした知らん。)

(水錢をおくんな。)

梓は極が悪いので、

(おや、おや。)と疑わしそうに言ったけれども、一種の見得で、自分には掬られたあてもないのである。

子供は同じことを、

(水銭をおくんな。)

(まあ、懷中を忘れたそうだよ。)

目をぱちくりして、委細構わず、

(水銭をおくんな。)

ただ六ツばかりの小児こどもに対しても、梓さきは性としてこれには顔を赧あかくして、立場なく後へ退さがろうとする。背後うしろに立つたのが、朝参あさまいりの婀娜あだたる美人で、罪もなく莞爾にこにこ々々しながら、繻子しゆすの不断帯の間から、膨ふつくりと懷紙わいしに包んだ紙入かみいりを抜いて取り、掌てのひらに拈ひげて緋地ひじの襷つ褌はきの紙入かみいりを開いた中から、指ゆびで環わを拵こしらえたような、小さな玩おもちゃ弄あそぶの緑きの天鵝絨びろうじの臺がまぐ口ちを引出して、パチンとあけて、幼兒おさないが袂たもとの中なかを覗のぞくように、あどけなく、嬉うれしそうに、ぱちりした目を細めて見ながら、一片ひとひらの、銀の小粒こまを、キラリと撮つまんで、向うへ投げた。

(小僧さん、旦那様の分もあるんだよ。)

梓さきは屹きつとなった。

美人は顧えんみて嫣然ぜんとして、

(あなたや、さあ、手をお出しなさいな。)

梓はここに到つて、胸中まず後の謝恩を決しながら、衝と差出した、医師のごとく、爾しかく綺麗な手に、一杯の清水せいすい、あたかも珠たまのごときを灌そそいで、颯さつと碎けると更に灌いだ、雫しずくも切らせず、

わたし私わたしのを使つて下さらなくつて。)と落着いて、静しずかに秋波あきなみに視みていいながら、ちよいと、仰向あおむいて

端を引いた、奉納の手拭てぬぐい、いまだ手摺てすれもなく新しい。

茶色の地に、白で抜いて、数寄屋町、大和屋内——ちよう吉——とある。

(姐ねえさん、きつとお礼をする。)と梓は心を籠こめてはじめていった。

(あら、何ですよ、)

(いいえ、)と押えて、そのまま別れて敷石の上を渡つた。額堂の軒、宮みやの廂ひさし、鳥居とりいの下もと、御手洗みたらしの屋根に留まつた鳩が、あちらこちらしばしば鳴いて、二三羽、二人が間をはらはらと飛交わした。納豆々々の声遥はるかに、人はあたりになかつたのである。——この間二年余あま相たち申もうし候そうろう。歌枕の今夜の逢あひ曳びき。

言語道断

二十五

「ちよいと今夜は私嬉わたいしいわねえ、こないだから塩梅あんばいが悪くツて、それにお前さんは久しくおいでなさらぬし、鬱ふさいでばかりいたんですよ。」と急にまたしめやかになった。気の変ることの極めて早い、むしろ鋭いといつても可いい。この女の心は美しく、磨いた鏡のようなものであろう、月、花、鶯うぐいす、蜀魂ほととぎす、来きたつて姿を宿すものが、ありのまま色に出るのである。

梓なつかしも可懐うなずげに頷うなずいて、

「ついちつとばかり忙しかつたもんだから、病気とは聞いていたけれど。」

「精出して勉強をしていたんですか。」

「ああ、」と何気なく答えたがふと気に懸かかつた様子で浮かぬ顔をした。

蝶吉はもとより何の気もつかないので、

「そう、生意気だねえ。」

「失礼な、人が勉強してるといふのに、生意気だといふことがあるものか。」

「あなたや、馬車に乗ろうと、いふんじやあなし、詰つまらなくツてよ。また煩いでもすると悪いもの。」

「だつて怠けてちやあ食べられませんから、」

「私わたくしが達たて引くから可いいわ、」といつて蝶吉は仇あどけ氣ない顔に極めて老実な色を装つた。梓はこれを聞いて、何か氣がさしたような様子であつたが、笑わらいに紛らして、

「どうぞ宜よろしく、」

「ええ、それはもうね。」

「しかし、私は駒下駄いじやあ厭いやなんだ。」と思ひ切つたといふ語氣で冷ひやかにいつて、屹きつと蝶吉を見た、目の中には一種の思おもいを籠めたのである。

蝶吉はさも思おもひ懸けなかつたらしかつた。

「おや、おや、異おつなことを、」といつて、澄すましたもの。

梓はここに至つて居い住ずを直した。

「いいえ、異なことをいふんじやあない、隠だてし立たてをされてはおかしくないよ、お前、松の

鮓すしは一体どうしたんだえ、」ときすがに問い兼ねて当らず障らず。

「厭あなよ、やくのかい、貴方あなた気に懸けるような対あいて手じやあなくツてよう、初心らしいことをいつて、可笑おかしいわねえ。」

「何しろ、全まくか。」

「はあ、」と極きまり悪げに男と見合つてた顔の筋うごかを動して、

「それはあの、何なの、だつて私わたいは何にも知らないんですもの、」と俯うつむ向いて膝の上を、煙管きせるで無意識たに敲たたきながら、

「だつてもうそれつきり何だつてあんな奴やつは何だろう、それを気に懸けて下さるのは、あんまり可哀かわいそうよ、蝶吉かじやありませんか。」といつて自らたゆげに見えて微笑ほほえんだ。

「その事じやあないよ、お腹なかの……」といいかけて、梓すずは我ながら面おもてを背けた。

「まあ、」

黙つて、俯向うつむいてしばらくして、蝶吉かは顔を赧あからめ、

「貴方、誰に聞いて来て、ようどこから知れたのよ。」

「なに少しばかり気になることを途みちで聞いたもんだから、つい、」

「もつとまだその上に知つてるんですか、」

蝶吉は驚いたような声。

二十六

「悪く思ってくれちゃあ困るよ、僕はね、知ってる通、遊ぶのはお前がはじめてだ。商売だから嘘を吐くもんだと思つていたんだけれども、お前が見ツともない、たというそんでも好いたとか、何とかいつて、そうして好いた真似をして見せる分には、好かれた者に違いはないのだから、好かれたんだと思つておいでなされば可い。いやに疑るのは見つともない、男らしくもない、とそういうから、成程そうだと、自分極で、好かれてると思つてる。ああ、ずつと惚れられたんだと思つて、これでも色男に成済しているんだ。だから、何も洗い立をして、どうの、こうのと、詮議立をするんじやあないけれども、今来る途中で、松の鮓が、妙なことをいつて当つ擦つたよ。」

「厭だ！」

蝶吉は閨を透見したものを、辱しめ、且つ自分のしどけなかつたのを愧ずるとき、荒ッぽい調子であったが、また自ら危んで、罪の宣告を促して弱々しく、

「何か言っていましたか。」

「残らず、」と神月はきつぱり言つた。

「へい、」と真面目に、蝶吉はたちまち三ツばかりものの言いざまに年紀としを取つたが、急に氣を換えて、

「だって、すっかり快よくなつてよ。西洋じゃあ皆みんな平氣ですつて。また田舎なんぞにはあたり当前まえだと思つてますとさ、私わたいもうさつぱりしたんです。

体にも障らなかつたといつて、今夜ねえ、床上げやら、何やらで、内の姐ねえさんが赤飯を炊いいてくれました。そして一杯飲んだんですもの、祝いわつたくらいじゃありませんか、不可けなくツて、え、え?」

蝶吉は梓こしほが何か易やすからぬ面おも色もちがあるのを見て、怪あやしむ様子。

梓は急に語ことばも出こでず腕こまぬを拱こまぬいて默然もくねんとしていた。

「よう、何を鬱ふさぐのよ、私わたいのことなんですか、不可けなくツて、」

「可いいも悪いもお前、」

言語道断だ。

「だってしかたがないじゃありませんか、」と詮せん方かたなげに蝶吉はぱつちりした目を細

うして、下目使いで莞爾したが、顔を上げてまじくりして、

「もつとも何なのよ。一度そんなことをしたものは、もうもう一生子供は出来ないツていうのよ。ですけれども、貴方嬰児はいらないんでしよう、ぎやあぎやあ泣いて可煩いから大嫌だつて言つたじやありませんか。ですもの、三ツばかりの児が、父さん、母さんツて、生意気な口を利くのが可愛いんですから、余所から貰うことにでもしましようにツていったら、それさえ面倒だ、可愛い口を利かせるなら鸚鵡を飼えば沢山だツて言つたんですもの。」

梓呆れ果てて言葉なし。

蝶吉はしたり顔で、

「ほら、御覧なさいな、可いじやありませんか、私も嬰児なんか欲しくないんですから、
」

と言ひ懸けて少し体を斜にして、秋波で男を見ながら指示すがごとく、その胸に手を当てた。

「こつちのお乳をお菜にして、こつちの大きい方をお飯にして食べるんだつて、」とぐツと緊め附けて肩を窄め、笑顔で身顛をして、

「厭、痛いわ！」

二十七

梓は耐りかねて、

「お蝶、」とちと鋭くいうと、いつも叱るのを外らかす伝で、蝶吉は三指を支いて的面に潰し島田に奴元結を懸けた洗髪あらいがみの艶かなのを見せて、俯向けに畏り、

「召しましたは何御用にござりまするな。」と男の仮声を造つて、笑いたさを切なく耐える風情。余りのことに気の弱い梓は胸が充満、女が見ないので心の張が弛んだか、瞞めてゐる目にほろりとした。が、思切つて、衝と寄つた、膝を膝に突掛けて、肩に手を懸けるとうっかりした処を不意に抱起されて、呆れるのを、熟と瞞め、

「可哀そうだな、お前は不幸ふしあわせに生れて来て、何にも世の中の事というものが分らないんだから、私は何にも咎めやしない。たといここで、目の前で、やあい、欺してやった、二本棒め、殺を言やあ嬉しがって、色男が聞いて呆れる、ざまあ見やがれと、愛想尽を言つて舌を出した処で、ちつとも肚を立てはしない。

いいえ、たとい悔しくツて、肚は立つても、お前を不人情だとも何ともいわないよ。こうすりや薄情だ、不人情だと思つてされてこそ、癩しやくだけれども、ちつとも知らないで言うことなり、することなら、不都合でも何でもなからう。

だから、何にも言わないが、その何だよ。お前は僕のことを初心だ、坊ちゃんだ、何にも知らないというそうだ。勿論三さがが下るものやら二あがが上るものやら、節は伸のほすもんだか縮めるもんだか、少しも知らない。通だとか粹まことだとかいうことは、からももんじいで分らないけれども、意気だといつて、この寒中、綿わたの入らない着物を着ていりや、体に毒だといふことは知つてるんだ。そしてまたここの芸げい妓しやは綿わたのはいったものを引摺ひきずつてるといって、お前の豪えらがることも知つている。

成程薄着ですらりとして、そりや姿は可いいだろう。ものが間違つて、馬鹿ばかげていて、仇あ気どけないのが可いいとして、わざとさえ他愛たあいないことをいうようにしこまれるくらいだそうだツてな、字引と首ツ引で、四角い字、難がたかしい理窟りくつばかり聞いてた耳に、お前が、訳わけの分らない、他愛たあいのない、仇気どけない、罪つみのないことを言つてくれるのが嬉うれしかった。なに面白おもしろかったんだ、面白いといやあ慰なぐさだ。それが段々嬉うれしくなつて、可愛かわいらしくもなり、ついこういうことにもなつたんだが、他愛たあいなさも、仇気どけなさも、お肚なかを……可いいかい、政府おかみへ知

れりや罪人だぜ。人にやあ交際つきあいも出来ないようなことをしながら、赤飯を食べさせられて、酔つて来るようになりや沢山だ。」とひそひそながら声と共に手に力が入ったので、蝶吉は赧あからむ顔を外そらしもならず、呼吸いきを引くように唇を動かしている。

様子を見守り、

「可哀そうに、決して、それを責めるのじゃあない。さつきも言う通とおり、お前がお前だから何とも思いはしないけれど、お前は十九で、私は二十五。七ツ違いの兄さんだ。まあ、妹だと思つていうから聞きな。」

下かた

二十八

さればぞ思い当る。一月ばかり前の夜よ、同じこの歌枕で会った時、蝶吉はそれとはなく、頬しきりに子が一人欲しくはないかといったのを、気にも留めなくて聞棄ききすてにしたが、松の鮓すしの

毒口を、ここで聞正せば實際で、梓は思い懸けず、且つ驚き且つ呆れ、あわれにも情なくも思つたのである。

梓はかつて、蝶吉の仇気ない口から、汐干に行つて、騒ぎ歩いて、水を飲んだ、海水は塩ツぱいということをも、さも大なる学理を発見したごとくというのを聞かせられた。

子供の中悪戯をして叱られると、内を駈出して、近所の馬鹿囃子の中へ紛込んで、チャチャチャツチキツツと躍っていると、追駈けて来た者が分らないで黙つて見遁しては歸つたが、私の顔は今でもおかめの面に肖てゐるかといつて、尋ねられたこともある。

その気であるから、蝶吉がおもてを歩いて、生意氣だと思ふ奴には突當つてやるといふから、何を弱虫、先方が怒つたらどうするといつて窘めれば、打たれそうになつたら二十五座へ紛込んで、馬鹿囃子を躍つてよ、と真面目でいふのだから耐ない。まさか今十九にもなつて、そうとは信じもすまいけれども、口でいふような幼心は、今もなお残つている。墮胎をしたものは刑法の罪人だといへば、何の事かもとより分らず、お前巡査に捕つて牢へ入れられなかりやならないといへば、また二十五座へ遁込んで躍るといふであらう、手のつけられたものではない。

さまでに世の中の事というものが分らない生立が、馴染むに従つて知れば知れるほ

ど、梓は愛憐の情の深きを加えた。

さらぬだに蝶吉は恩人である。殊に懐旧の情に堪えざる湯島の記念がある上に、今はある者は死し、ある者は行方の知れない、もの心を覚えてから、可懐しい、恋しい、いとおいしい、嬉しい情を支配された、従姉妹や姉に対するすべての思を、境遇の斉しい一個蝶吉の上に総合して、その情の焦点を聚めているのであるから身にかえても不便でならぬ。

まして打明けた蝶吉の身の上を悉く知つてからは、謂うべからざる同情の感に打たれたのである。

梓は何となくよく似た身の上だと思つた。

蝶吉の母親は旧京都のしかるべき商賈の娘であつたが、よくある、浄瑠璃の文句にある、親々の思いも寄らぬ夫定めで、言い交した土佐の浪人とまだ江戸である頃遁げて来た。二人で根岸に隠れている中、時世といい、活計を失つて、仲之町の歌妓となつた、且つ勤め、且つ夫に情を立てて、根岸に通つている内に、蝶吉は出来たので。

子持の母も芸で通り、馴染の座敷では小女が連れて来ると、背後を向いて、三味線を下に置いて、懐を開けて乳房を含ませるといふ境遇であつたが、誕生を済して、蝶吉がようやく立つて歩くようになると、根岸では、父が病の床に倒れたがまた起たなくなつた。

越えて三歳みつつになる時、母親は蠣殻かきがら町の鼻屑ひいき客きやくに、連児つれこは承知の上落籍ひかされて、浜町に妾宅を構えると、二年が間、蝶吉は、乳母おんば日傘で、かあちゃん、かあちゃんと言えるようになった。

二十九

それもしばらく、米屋町は米の上り下りで人間の相場が狂い、妾宅の主人は大失敗で、落魄らくはくして、最後に一旗という資本がないので、心まで淋しくなり、蝶吉の母に迫って、その落籍ひかしただけの金員耳いひとを揃えて返せという。

蝶吉の母は根岸の情人いひひとが亡なくなつてから、世を味気なく、身をただ運命に任せていたので、いうことに逆らわず、芳町から再勤したが、足りない金子かねは、家財を売って、それでもまだ償われなかつたので、蝶吉を仲之町の大坂屋というのに預けた、年期が十三年。

廓くわくの抱妓かかえの慣例として、色はきつと売らさぬ代り、芸事にかけてはいかなる手段をもつて仕込んでも差し支えはない、少々痛いおもいをさせてもという口約束をしたのであるから、そのせたげようと云つたら方外な。

座敷は三人が一组、姉株の芸妓が二人、これに蝶吉が、下方を持って跟いて行くのであつた、といつて、いつか雪の降る夜、身の毛を悚立てて梓にその頃の難苦を語つたことがある。

座敷がある、客はというと、あの土地では夜が更けてからのが多い。それという声か懸ると、手取早く二人の姉分の座敷着を、背負揚、扱帯、帯留から長襦袢の紐まで順序よく揃てちやんと出して、自分が着換えるとその手で二人分の穿物を揃えて、三味線を——その頃腕達者な烈しい姉は、客の前で弾切ると糸を掛けてる中も間が抜けるといつて、伊達に換え三味線を持つたので——四張。呼ばれた青楼の帳場まで運んでおいて、息を切つて引返す、両手に下方を持つて駈着ける。

それから四張の三味線を座敷に運んで、調子を合せて、差置くや否や、取つて返して、自分が持の下方の調の緒を《し》める時分には、二人悠々と入つて来る。穿物の雪を落して、片附ける間も心が急かれ、座敷へ上るとお座附の済む頃で、膝に手を置く猶予もなく、それ下方といつて責められるが、指の皮が破れてる上に冷たくツて手がかじかむ。息が切れて、もう小鼓を肩に振懸ける力もない。

これを梓に言つた時、蝶吉は床から出て、友染の夜具の袖を敷いたと見ると、長襦袢の

まま片膝を立てた。その上に手を翳して、

(私わたくし小さくツてこれんばかりだつたんですもの、鼓ばかりで体がどこにあるか分らなかつたの。)と、いいつつ片手を肩に懸けて、小鼓を構える姿で屹きつと直つた。鬢びんの毛ははらりはらりとその雪のような素顔に乱れたが、往時を追懐する目も据すわつて、いふべからざる悲哀の色を浮うかべたので、梓は思わず寝衣ねまきの襟を正して起きた。

とんと打入れる発奮はつみをくツて、腰も据らず、仰向あおもむけに引くりかえることがある、ええだらしがない、尻から焼火箸やけひばしを刺通して、畳の縁へりに突立つたててやろう、転ばない呪禁まじないにと、陰では口汚ののしく詈ののしられて、帰ると耳を引張ひっぱつて掌てのひらで横すつぽう。襟首を取つて伏せて、長ながぎ煙管せるで背せなかを擲くわすという仕置。ただその粗忽そこつがあつた時ばかりではなく、着物なまきずを畳んで背筋を曲げたと云つては折檻せつかん、踊がまずいといつては打たれて、体に生疵なまきずの絶間もないのに、寒さは骨を通すようなあけ方までも追廻ちややされて、二人が帰ると、着物から三味線下駄のあと始末、夜が明けると帳面をさげて、青楼ちややを廻らせられるので、寝る間といつてもおちおちない。

昼は昼で、笛やら、太鼓やら、踊の稽古、手習も一日置で、ほつという間もなかったのである。

うろ覚えに実の母親は知っていたけれども、年紀も分らねば所も知らず、泣けば舌の尖を捻じられるから、ほろほろ、涙を流しては、といった、蝶吉はその時、崩折れて涙を払った。

土手など通ると、余所の児が母親に手を曳かれて行くのを見たり、面白そうに遊んでい
るのを見るたびに、同じ人間がなぜだろうと、思わぬ時といつてはない。ある時も、田圃
のちよろちよろ水で、五六人、目高を掬っているのを見ると、可羨しさが耐えられない
から、前後も弁えず、裾を引上げて、袂を結えて、私も遊ばして下さいな、といって流
に入った。やい、売婦め、お玉杓子め、汚らわしい！ と二三人、手と足を取って仰向
けに引くりかえしたので、泥水を飲んで真蒼になつて帰ると、何条これを許すべき、突
然細紐でぐるぐる巻、濡しよびれたまま高い押入の中に突込まれた。半日とその夜の夜
中二時頃まで、死んだものようになってる中に、私ばかり、情ないものを、辛いものを、
慰めてこそくれずとも、売婦だといって突転がした町の奴等。

内で芸事をせたげるのも、皆手前達みんなが甘やかされて、可愛がられて、風にもあてず育てられた、それほどの果報にも飽き足らず、にきびの出る時分にはその親に泣なを見せて、金を掴つかんで、女をもてあそびに来うせるためだ。蹴飛ばしてやろう、おのれ、見返してやろう、おのれ誑だましてやろう、黴なぶつてやろう、死ぬような目にあわしてやろう。泡を吹かせずにおくものかと、それからは氣に張はりが出て、稽古事も自分で進み、人には負けぬ氣で苦勞も氣にせず、十七の年紀としまで遣やり通したが、堅い荅つぼみも花になつて、もうあとへ、自分を姉さんといつて冊かしずのが出来て、秋の仁和賀にわかにも引ひけを取らず、座敷へ出ても押されぬ一本、地じは清元で、振ふりは花柳はなやぎの免許を取り、生なま疵まきずで鍛え上げて、芸にかけたら何でもよし、客を殺す言句もんくまで習い上げた蝶吉だ、さあ来い！

花も見、月も見る癖に、活いきた女を慰もうとする畜生等、目にも物を見せてやろう、簪かんざしの先が尖とがつてるから、憎まれて怨うらまれて、殺されそうになったらば、対手あいての目球めだまを突つき潰つぶして、体だけ逃げれば可いいと、柳眉星眼火りゆうびかえんの唇くちびる。満腔まんこうの不平を湛たえて、かえつて嬌え然んげんとして天の一方を睨にらむようになり得ると、こはいかに、薄汚うみい、耳の遠い、目の赤い、縋ぼろを纏まとつた婆さんが杖つえに縋すがつて、よぼよぼと尋ねて来て、生うの母親が大病である、今生うみでたった一目、名残なごりが惜おしみたいという口上。

夢にも逢いたい母様と、取詰めて手も足も震う身を、その婆さんと別仕立の乗合腕車。
 小石川指ヶ谷町の貧乏長屋へ駈着けて、我にもあらず縋りついた。母様、峰（幼名）か、
 と嬉しさのあまり、呼吸の下で声も出た。母親はその日絶えなむとする玉の緒を蝶吉の手
 に繋ぎ留められて、一たびは目を開いたが。

一目見廻した様子でも、医師はいうまでもないこと、風薬の手当も出来ないと見て
 取つて、何は措いて、蝶吉は一先ず大坂家に帰つて、後の年期も少いので、上借をして
 貢いだけれども、半日もままならぬ抱妓の身。看病人を頼むのも、医者を中心けるのも、
 北里と、小石川の及腰、瘡細るばかり塩気を断つて、生命を縮めてもと念じ明した。

狂犬源兵衛

三十一

七日目の朝、ようようのことで抱主から半日の暇を許され、再び母親を小石川の荒

ばつや
屋に見舞うと、三日が間、夜も昼も差込み通し、鳩尾みずおちの処へぐツと上げた握にぎりこぶし掌てのひらほ
どのものが、上へも下へも通らぬので、唇の色も紫になっていたのが、蝶吉の手で擦さすられ
ると、恩愛の情に和げられて、すやすやと寝ることが出来た。三時間ばかり経たつと、病苦
も忘れたようになり括くくりまくら枕まくらに胸を圧おさえて起上たつた時、蝶吉は生れて以来、しみじみ顔を
見たのである。

(よく紀の国屋くにやに肖にていてよ。)

と蝶吉がそう云う顔立かおたち、母親は名を絹ぬいといった。

娘を大坂屋に預けて、その身み葭よし町ちやうで弘ひろめをしてから、じみちに稼かせぎ稼かせぎ借金をなし
崩し、およそ五年ばかりで身脱みぬけをした、その間に世話をするものがあつて、自前みづかみになつて
御神燈を出したが、可よい抱かか妓えの一人も置いてやろう、と言いうものがあつたけれども、母親
はこれを己おのれに鑑かんみ、たといそうして所得しやくとくが有あつて身代みしろが出来た処で、汚けがれた金で蝶吉を救す
出くしては、きつと末すえがよくあるまい。また二度つとめの勤ととめをしてますます深ふかみへ落ちようも知
れず、もとより抱かか妓えを置く金で仲之町なかつまちから引取ひきとつて手許てもとで稼かせがせる数かずではなし。さればと
いつて人の深切しんせつも、さすがに娘を落籍ひかしてくるまでには到いたらなかつたが、女腕めづで一人を
過かす片かた違ひまに端はし金がねを積立たてても、なかなか蝶吉の体は買取かひられぬ。たとえばそれが出

来るにせよ、母はもとより天道の大御心には協わぬ生立、自分の体を牲にして、そして神かみほとけ 仏の手で、つまり幽冥ゆうめいの間に蝶吉の身を救つてやろう、いずれ母娘おやこが、揃つて泥水稼業というは、免れぬ前の世の因縁づく。罪滅つみほろぼしのためだと思つて母親の持った亭主は——間黒源兵衛——渾名あだなを狂犬やまいぬという、花川戸町の裏長屋に住む人入稼業、主に米屋の日傭取ひようとりを世話する親仁おやし。

渡者わたりのものを振廻して処々の米屋に稼がしておく、お絹はその賃錢を集めに廻つた。橋場今戸の居まわりは云うに及ばず、本所、下谷、飛離れて遠くは日本橋あたりまでも、草履ばきで駈かけずり歩かねばならないのみならず、煮るも、炊くも、水を汲くむのも、雑巾がけも、かよわい人の一人手業てわざで、朝は暗い内に起きねばならず、夜になるまで、足を曳摺ひきずつて、日雇ひやといの賃錢を集めて、家に帰ると親仁の酒の酌をして、灸きゆうの蓋を取換えて、肩腰かたこしを擦さすつて、枕に就かせて、それから、歩を取つて、各々めいめい、二階に三人、店に五人、入交いれかわりに泊とまりに来る渡者の稼ぎ高に割当てて、小遣こづかいを遣やつて、屋根代を入れさせる。この算用を算そ盤ばんばちばち、五を引いて二が残り、たった三厘の相違があつても髻たぶさつかを掴つかんで引摺倒ひきずりたおそうという因業いんごうな旦那を持つてゐるから、夜の更けるまで帳場に坐つて、その疲れ果ほつててと一息吐くと綿わたのようになる体で、お絹は添臥そいぶしをしたのである。

何の！ 踊の稽古をしても、三味線の弟子を取つても、我身一ツは安々と世間を清く過さるるを、獄に投ぜられて苦役に就いても、さばかりにはあらずと思う、ほとんど生身を削り落すような難行をしたのは、あえて墮地獄の我身の苦患を扶かろうというのではない、ただ単に蝶吉のためにしたのであつたと、母親がその時の物語。

三十二

もとより自ら進んでも、かくはなるべき運命であつたらうけれども、さまでとはさすがに思い懸けなかつた、積年の憂苦辛酸、一日の安き暇もないので、お絹は身も心も疲れ果てて、その一月ばかり前から煩い出し、床に就いて足腰の自由が利かなくなると、夫狂やまい犬源兵衛は屋外にこれを追出した。それを争う力もなくて、指す方もなく使つたのが、この耳の疎い目腐れの婆の家、この年寄の児は、かつて米搗となつて源兵衛が手に懸つて、自然お絹の世話にもなつたが、不心得な、明巢覗で上げられて、今苦役中なので、その以前から悴の縁で、お絹にも厚意を受けた。年寄は恩を忘れず家へ引取つて介抱をしてはいるけれども、活計に窮するのはいうまでもない上に、耳が遠くツて用が足りず、水

一杯といつても聞えない看護を請けるお絹の身になつたらどうであつたらう、またこれを知りつつも、一晚と附切つて介抱することのならなかつた蝶吉の気はどんなであつた？人が神仏を怨むのは正にそういう時である。

そちこちする中、昼も過ぎたので、年寄はまめまめしく形ばかりの膳立をした、お菜がその時目刺に油揚げ。

(母さんが烘つて上げよう、)と、お絹は一世の思出。知死期は不思議のいい目を見せて、たよたよとして火鉢に凭つた。夏近いが、寒いからと、年寄は危んで、背後から昆布のような蒲団を被せようとすると、これじやあ汚らしくツて折角の馳走も旨しゆうないと、取つて撥退けたので、蝶吉が心得て、被ていた羽織を脱いで着せた。

(じみなんですから母さん似合いますよ、)と嬉しそうにいう顔を視めながら、お絹は手を通しつゝ振沢山な裏と表を熟と見て、

(峰ちゃん、生意気なものを着てるね、)といった。故郷の京の色香に江戸の意気張を持つて、仲之町でも、葭町でも、小さんといつて、立てられた蝶吉の母は年紀わずかに十三、最後の太厄で、その日の晩方、男は自分で見立てると言つて遺言して、日本の男と女の中に、しかも、廊の中に、蝶吉ばかりを残したのである。あと十日とは措かないで、

小石川柳町から丸山の窪地へ水が出た時、荷車が流れたのが、根太へ打つかつて、床を壊すと、件の婆は溺れて死んだ。これも葬る者がないので、蝶吉は母が臨終に世話になったのを恩として、同じ寺に葬ったのである。

印の墓石はいまだ立てることは出来ないけれども、出来る時だけは欠かさないで参詣する、梓がなかった以前は、ただその墓に取継ることばかりがこの上もない楽しみであった。

蝶吉はその亡きお絹の引合せだと信じている梓に、いつの晩か手を開いて見せた。指の先が色に染まって、赤くなつて血が浸んだようなのを怪んで聞くと、今日お墓参りをした時濡れ手で線香を持ったといつて、

(私母さんと御膳を食べたのは生れてからたった一度なんですもの、)と継り着いて泣いた。その手が冷たかつたから、梓は思わず、しつかと胸に抱いたのである。

(お宗旨は何だ。)

(知りません。)

(問えば可いじゃあないか。)

(だって可笑しいわ。)

(じやあ何てツて拜むんだな。)

(一生懸命に南無阿弥陀仏。)

この女が、この体で、この姿で、ただ一人墓の前に泣くのだと思つて、梓は抱いたまま放さなかつた。

三十三

「よ、どうしてそれが見棄てられるものか、まだその上に蝶吉は子供の時から、怨と、僻ひがみと憤いきどおりをもつて見た世に對して、謂いわば復讐ふくしゅう的に己おのれが腕で幾多遊冶郎ゆうやろうを活殺して、その肉みを啖くらい、その血を嘗なむることをもつて、精魂の痛苦を癒いやそうとしたが、あたかも母の死に逢つて志を果さず、まだ一たびも男に向つて、誑だますの黷なまるのといふはもとより、お世辞一ツ言わずにいた身をもつて、これを梓に獻じたのである。譬たとえば、その家は壊こぼれたれ、その樹は伐きられ、その海は干され、その山は崩され、その民は屠ほふられ、その女は姦じよせられた亡国の公主にして、復讐の企図いだを懐いて、薪胆しんたんの苦を嘗め尽したのが、張はりも忘れ、意気地も棄ててかえつて我に哀あいを請い、一片の同情を求むるのである。天下またかくのごと

く憐むべく悼むべきものはあるまい。何としてそれが見棄てられよう。蝶吉は残少になつた年期に借り足して、母親を見送つてからは、世に便なく、心細さの余、ちと棄身になつて、日頃から少しは飲いた口のますます酒量を増して、ある時も青楼の座敷で酔つた帰りに、夜更けて京町の夜露の上に寝倒れた。月が射して、その肉は蒼く、その骨は白く見ゆるまで、冷えて霜を浴びたようになつたのを、往來の仕事師が見附けて、大坂屋へ抱え込むと、気が付いたが、急に胸前へ差込が来てから、持病になつて、三日置ぐらいには苦しむ悶える、最後にはあまり苦痛が烈しいので、くいしばつても悲鳴が洩れて、畳を掻むしつて転げ廻るのを、可煩いと、抱主が手足を縛つて、口に手拭を捻込んだ上、氣つけだと言つて、足袋を脱がせて、足の拇指の間へ続け様に灸を据えた。妙齡になつてから、火ぶくれの痕は、今も鮮明に残つてると、蝶吉は口惜しそうに、母親に甘えるごとく、肩を振つて、浴衣に搦んで足を揃えて、小さい爪尖を見せながら、目に涙を浮べたその目で、待合の襖の紙が蟹のような形に破れているのを見付けると延した足の拇指を曲げて、件の破目を、

(繕つたら可さそうなものね、何だい、何だい、)と叱るようについて抉るのを、

(馬鹿な、)と叱りつける梓の顔、鼻を詰らせながら、涙の目で、蝶吉は嬉しそうに瞞め

ていた。それをも梓は忘れはせぬ。そんな他愛のない、取留のない、しかも便りのない孤みなしごに、ただ一筋に便らるる、梓はどうして棄てられよう。

蝶吉はかの時無慙むざんなる介抱をした抱主の処置に平たいらなることあたわず、圧おさえ切れない虫は突走つっぱしつて、さてこそ天神下の口入宿へ来たのであった。柳橋か、葭町よしちようかと行先を選

んでいる中に、内々うち勧めるものがあつた。これは天下の秘密だけれども、髪結かみゆいが一人、

お針が二人、料理人が一人、医師が一人、女を十二人選んで、世話役が三人これを頭取が

率すべいてパリイとかシカゴとかいう処の、博覧会へ日本の女を見せに行く。場所ゆも薔薇ばらの花

の盛さかんな中へ取つて、朱塗しゆぬりの埒らちも結つてある、日給は一日三円、十月の約束でどうだとい

う。どの道東京で死んだ処で、誰一人そうかとも言つてくれない体だからと、既に觀世物みせもの

になる処、湯屋の前でふつと見た梓に未練が残つたので、ようよう獸けだものに楽たのまれるだけ助か

つたのである。その話をする時も、蝶吉は坐つたまま、大手を振つて、

(こつやつて威張つて見せてやろうと思つたのよ。)

梓は余りのことに吹出して、

(シヤモの牝めすはこれでございと一言やあしないか、)

(まずね、)と莞爾にっこりした暢氣のんきさ加減、浅はかさも程があつた。

「僕が附いていない日には、お蝶、お前どんな目に逢おうも知れぬ、」と梓は息を吐きもあえず、

「それさえ見棄てて、別れなければならぬような、児を墮すなどという、飛んだことをしてくれた。」と蝶吉の項を抱いて口移しに囁んで含めるように、自分の赤心を語るため、今まで久しい間、時に触れ、折に当つて、動かされた、至憐至愛の情の切なるを、ここに打明けて語つたのである。

蝶吉は聞くこと半ばにして、色を変えて、心、その心を貫くごとに、ほとんど顔を見らるるに耐えざるごとく、摺抜けて駈出しもしかねない様子に見え、左に、右に、その面を背けたが、梓の手と、声と、語と、真心は、ますます力が籠つたから、身も世もあらず、動きもならずいうこと、ここに到る頃いの、果は、悄然と頭を低れて、腕に落した前髪がひやりとしたので、手折つた女郎花の儂い露を、憂き世の風が心なく、吹散すかと、胸に応える。

「僕だつて最初はしめからこういう間の中といつちやあ、末始終すえしじゆうはきつと泣なを見なければなら
ないと思うから、今度こそ別れるような話にしようか、今度こそと、その度に悄しおれちやあ
ここへ来ると、何かしらお前に言われること、されることが、一々思いの増すようなこと
ばかり。私はもう一服しびれぐすりずつ痺薬を飲まされるようだった。

今じゃ家にも居られなくつて、谷中に引込ひっこむようになった上は、どうせ破れかぶれだか
ら、人が何といつたつて、世間も義理も構うことはない、お前とどうぞしてという覚悟を
極きめた処へ飛んだことを聞いてしまった。

お蝶さん、お前は訳が分らないから、何にも世の中のことは知るまいがね、およそ墮胎だたい
ということをした者は、これが罪とも恥とも知らないでした事にしろ、心は腐つても、人
間という目鼻だけの、せめて皮でも被かぶつてる中うちは、二人竝ならんじやあ居られやしない。こう
言えば水臭いと、きつと私を怨うらむだろうが、いつも言う通り、お前のような稼業をしてい
る者とは、兄弟であつたり従姉妹であつたりした上に、皆みんなにたんと世話にもなつた。どう
いう因縁だか、お前にも恩を被きた私だから、訳は分つてる、こう見えても可愧はずかしいが、馬
車に乗つたこともあるし、御前様ごぜんさま々と畏かしこまれたこともあるが、大な声一つ出してお前
にやあ、用を言い付けたこともない。あんまり大人しくつて、頼りがいがないから、私は何だ

か物足りない、きりツとして叱つてくれ、かんしやく癩癩を起して横顔の一ツも撲られたいと、げいしや芸妓のお前にいつも言われた、男が一人そのくらいに惚れたら可よかろう。故郷とは始終たより便をして、人のおもちやになつてゐる女に、姉上々と書いたから、ああこんなことをするような身分ではないと知りながら、お前の手紙が来れば、様づけにして返事を出した、何も機嫌を取つた訳でもなし、取入つて色男になろうと思つたのでもない。

うわべはどうでも、理窟は知つても、小児の内からの為しきた来りで、本ほん当に友達のようにも思い、世話になつたとも思う上に、可愛こどもい、不便ふびんだと思ふから、前あし後も考えなかつた。お前を立派な女だ、姫ひいさま様だ、女房おかみさんだと心しんから思つてしたことだよ。僕はお世辞も何にも言わない。女は氏こしなくして玉の輿こしだから、どんな身分の人に姉さんといわれなくても限らぬが、そりや男の方から心を取つて惚れさせようとか、氣に入られようとかして、後おもじやあ玩もちや弄もちやにするためだ。

い可い餌えさをかつて肥えさしてしめて食べようという、鴨かもと同じおんな訳じやあないか。これが遊あ人そびにんとか、町内の若い衆とかいうなら知らず、ちつたあ身分もあるものに本ほん当に惚ほれられたげいしや芸妓といつちやあ、まあ、お前一人だあきららうよ。

それを思おも出いにして、後生あきらだから断念あきらめておくれ。神月ていしゆは私の良人ていしゆだったと、人にい

つても差支えはない。そして謂うに謂われない仔細があつて別れたといつて御覽、お前の恥にやあならないから、よ、解つたかい。

いまにもう少し年紀でも取つて、ちつたあ分別がついて来ると、成程無理はなかつたと、自分のしたことに気が付いて私の心も知れるから、体だけ大事にして軽忽をしないで辛抱しな。別れるといつて見棄てやしない、蔭じゃあどこまでも思っている、」と神月もほろりとした。蝶吉は死んだ者のようである。

三十五

「悪いことはいわれないから、その綿の入らないものを威張つて着るのと、いつもいうことだけれど、これから暑くなつて、氷の打欠をお飯にかけて食べるのと、それから無理酒を飲むのは止せ、よ、気を付けなけりや、お前今年は大厄だ。」

としめやかに言つたがふと心付いて、手を弛めた、

「酔醒か。寒くはないか。」

「いいえ、」と内端に小さな声で、ものを考えるがごとく蝶吉はいつた。

「そうか、また冷えると悪いぜ。」

「ええ。」と仇気なく秘さず、打明けて縫り着くような返事をする。梓はこの声を聞くとひとしお入思入つて、あわれにいとおしくなるのが例で。

「体はもうすつかり良いのかい、」

「ええ、」

「お前は駄々ツ子で、鼻ツ端が強くつて、威勢よく暴れるけれど、その実大の弱虫なんだから心配だよ、この頃は内で姐さんと喧嘩はしないか。」

「ふふ、」と泣出しそうにしながら、蝶吉は無理に片頬で微笑む。

「やっぱり母様の夢ばかり見てるのか。」

「ええ、」ともいわず蝶吉は面を背けると、御所車の簾の青い裏に、燃立つような緋縮緬を、手に擲んで、引出して、目を拭つて、

「何にも言わないで下さいな、胸が一杯になつて来てよ、可笑しいねえ、」といつて袖口を除けたが、ぱつちりと目を睨いて、梓を見まいとするかのごとく、あらぬ方を瞞めたけれども、

「おやおや、可けないねえ。」

また俯向うつむいて目を塞ふさいで、

「貴方あなた、手を放して下さいな、」

声も消入るようであつた。

梓はともかくも蝶吉の心の落着おちつきいているのが知れて、いうままに手を放したが、ほとんど失心ししんしているような女の体は、そのまま背後うしろへ倒れるだろうと思つた。

蝶吉は、かえつて、ちゃんとして、膝ひざに両手を組みながら、恍惚うつつりして梓の顔を見ていたが、細い声で、

「あなた、」

「どうしたの、」

「後生ごせいだから顔を見ないで下さいな。」

梓は思おもわず面おもてを背けた、火鉢かまどの火は消えかかつて籠かご洋燈ランプの光も暗い、と見ると瘦やせた薄すすきと、悄しおれた女郎花おみなえしと、桔梗ききょうとが咲乱さかれて、黒雲空くろぐもぞらに、月は傾かたむいて照あらさんとも見え、あわれに描えいた秋草あきくさの二枚折ふたまいせの屏風びょうぶが立たつていのが、薄暗あかりい灯あかりで、幻まぼろしのようでもの寂さびしい。

「私泣わたいくんだから、あつちを向むいても可よくツて?」

梓は頭つむりから寒くなつたが、俯向うなずいて頷くと、蝶吉は向むこうむきになつて屏風に影が映つた、その胸をしつかり抱いた。

着物の振ふりが両方から、はらりと追つて、身も痩せた。細々とした指の尖さきが、肩から見えて、潰つぶし島田の乱れかかつたのを、ふらふらとさして熟じつとしていたが、折れたように身を倒す、姿はしぼんだごとくになり、声を殺してわつと泣いた。梓も耐たまらず、背向そがになつた。二人の茫ぼんやり然した薄い姿は、件くだんの秋草の中へ入つて、風もないのに動いたと見ると、一人は畳へ、一人は壁へ、座敷の影が別れたのである。

半札の円輔

三十六

「さて早や、」と云う懸かけ声こゑで大和家の格子戸を開けて入る、三遊派の落語家はなしかに円輔えんすけとて、都合に依れば座敷で真を切り、都合に依れば寄席よせで真を打つ好男子。但しこの男が真

あいにく抱妓どもは皆出を勤めて居らず、女中は忙しいし、姉御は用達にお出懸けなり、火鉢の灰は綺麗だし、注す後から鉄瓶の湯は煮立つので、色男余の所作なさに、猫を撫でたり、擦つたり、どうしたなどと、言つて見たり、耳を引張つたり、髯の数を数えたり、様々に扱うと、畜生とて黙つておらず、ニヤアと一声身顫をして駈出そうとするのを、逃がしてなるか、と引抱て、首環に嚙り着いて、頬杖して、ふと思ひ着いて、「恩愛雪の乳貰」という気取、わざと浮かぬ面をしている処へ、件の半札がさて早であつた。

「師匠上りたまえ。ようこそ、」と諸事内の人で挨拶する。

ぐツと呑込んで、円輔はあたりを、し、

「へへえ、成程、あいにく出懸けまして御愛想もございませぬがね、どこへ、姐さんは。」
「また、これだそうさ、」といつて窪んだ顔の真中へ指をした、近眼鏡の輪を真直に切つて、指が一本。何と気を変えたか、宗匠、今夜は大いに俠つて、印半纏に三尺帯、但し縹珍の蓑入に象牙の筒で、内々そのお人品な処を見せてござる。

円輔は細長い膝を小紋縮緬の薄ぺらな二枚襲の上から、掌でずらりと膝頭へ擦り落すこと三度にして、がっくりと俯向き、

「さてはや。」

三十七

「どうしました、大分落胆の気味だね、新情婦も出来ませんか。」と源次郎は三味線の挂かかつた柱に凭もたれて澄もましている。

円輔はまた耳みみ朶たぶへ掛けて頬ほ辺ぺたを扱こき上げて、

「いや、まず、はははは、時に何は、君の落おッちはこうしたんでげす、お座敷かね。」

「何ちつと、遠方だそうです。」

「ははあ、遠出でげすかい、なにかに就つけてさぞ気が揉もめるこつてえしよう、よ、色男。」
と浮うツわ調子で臀しりをぐいと突くと、尋常じんじょうに股すを窄すぼめて、

「止よせてえに、これ、詰つまらないことを、何だ。こう見えても苦勞があるんだから、ねえ、おい。」と甘あまツたるい。

「よ、苦勞！」

と仰う々ずしく手を支ついて、ぐツと反かつて、

「来きましたね、隊長、恐おそれ入いったね、どうも。苦勞と来きたね、畜生ちくせい、奢おごりたまえ、奢おごりた

まえ。」

「いずれ帰ったら奢らせることに致しましょうよ。」と北叟笑ほくそえみをする。

「これは！」

「いや、師匠、串戯じょうだんは止してさ、蝶吉が帰りさえすりや、是非その御一統が一杯ありつこうという寸法があるんでさ。ごくごく吝嗇けちに行った処で、鰻うなぎか鳥ね、中な処が岡政で小ぎつぱり、但しぐつと発奮はげんで伊予紋となろうも知れず、私わつしや鮎屋だ！ 甘いものは本人が行けず、いずれそこいらだ、まあ、待っていたまえ。」

「確かに、」

「ええ、確かしつかだ。」

「豪えらい！」と大声を張上げて、ぴたりと、天窗あたまを下げたが、ちやんと極きまつて、

「さてどつちです、こうなると待遠しい。」

「八丁堀だそうだ。」

「成程御遠方だ。幾時頃から、」

「一昨日おとといの晩から行きツ切り、おなじく、」と鼻を指して、「ね、さつき使つかいが来て、今夜は遅くとも帰るツていうんだ、ねえ、升ますどん。」

勝手から女中の声で、

「はあ、」

「ねえ、おい、富ちやん。」

次の部屋の真ま中なかで、盆に向つて、飯鉢おはちと茶の土瓶を引寄せて、此方こなたの灯あかりを頼りにして、

幼おきなご子が独り飯食う秋の暮、という形で、搔かつ込んでいた、哀あわれな雛おしやく妓やくが、

「ええ、」と答えてがツくりと飲む。

「確たしかかい。」

「きつとでございますつて。」

「占めた！」という時からからと戸あが開いた。

円輔は振返つて、

「や、御帰館わめ！」と喚わめいて、座を開いて、くるりと向く。

源次はぬうと首を伸ばして、

「誰たれだい、」

「蝶吉ていきちさんだよ、誰だたあ何のこツた。」

「そう、」といつて源次は猫を落して坐り直つた。

蝶吉は何かしよんぼり 然として帰つて来たが、髪も乱れて、顔の色もぼんやり 茫然まへだしている。前
垂懸れがけで縷子しゆすの帯、唐棧とうざんの半纏はんてんを着た平生ふだんの服装なりで、引詰ひつつめた銀杏返いちようがえし、年紀としも老
けて見え、頬もや痩せて見えたが、もの淋しそうに入つて脇目もふ触らず、あたりの人には目
も懸けないで、二階へすま澄して上あがろうとするのを、円輔がみつ瞋めて、ちつと当ての違つたとい
う形で、変に生真面目きまじめに、

「お帰んなさい。」

「唯ただいま今、」と言つたばかり、つんとしてトン、トン、トン。

三十八

「御機嫌麗わしからずじやあないか。顔色が可恐おそろしく悪いぜ、花札ふだが走つたと見える、御ご
馳走ちそうはお流れか、」と円輔はてかてかした額を撫でた。

「いえ、師匠、御馳走はその勝負にやあ寄らないんだ。但し御機嫌の悪いのはこの節しよ
つちゆうさ、心こころ太とこの拍子木じやあないが、からぶりぶりしてらあな。」

「やっぱり……。」と押えて、それか、と呑み込んだようにいうと、源次は黙うなずつて頷く。

声を低うして、

「何でげすかい、あの神月とやらしい先生に一件が知れて、先方から突出したというのは本当なんで？」

「ああ、」と何だか聴きたくもなさそうに、源次郎は乗らない返事。

「成程竝べて置けば雛一對というのだが、身分には段があるね。学士と謂やあお前さん、大したもんでげしよう。その上に華族の婿様だというじやありませんか、幾ら若い同志で惚れ合つたつて、お前さん、その身分で芸妓に懸り合つて屋敷も出たつてえから、世の中にやべら棒もあつたもんだ。それだから円輔も大学へ入る処をさらりと止して、落語家となつたような訳だと、思つたんでげすが、いや、世の中へ顔出しも出来なくなつた処で、子を墮したと聞いて、すつぱり縁を切つたなあさすがに豪いや、へん、猪口の受取りようを知らねえような二才でも、学問をした奴あ要が利かあ、大したもんだね、して見ると蝶さんが惚れたのも男振ばかりじやあないと見える、縊が戻りそうでもありませんかい。」

「どうして、ちつとでも脈がある内に鬱ぐような女じやあないんだ、きやつきやつて騒があね。」

「成程、して見るとこちとら一味徒党。色情事に孕むなあ野暮の骨頂だ、ぽてと来るとお座がさめる、蟄の食傷じやあねえが、お産の時は腸がぶら下りまき、口でいってさえ粹でねえね、芸妓が孕んで可いものか悪いものか、まず音羽屋に聞いてもらいたいなんてツて、あの女が、他愛のない処へ付け込んで、おひやり上げて、一服承知させた連中、残らず、こりや怨まれそうなこツてげす。何を目当に、御馳走なんぞ、へん下らない。」
と円輔はまた落胆、源次は落着き澄して、

「師匠心配したもうなツてえのに、疑り深いな。」

「だってあの御気色を御覧じろ、きつとあれだ、違えねえね、八丁堀で花札が走つた上に、怨み重なる支。那と来ちやあ、こりや奢られツこなし。」

「勿論僕の、その御相伴なんだよ。」

「へ、君だつてあんまり、奢られる風じやありますまいぜ。」

「ズツと有る、有るね、そこあ憚りながら源ちゃん方寸にありさ。」

「じゃあ一番お手形を頂きたいね。」と円輔は詰寄つた。

「手形宜しい。当てが違えば、師匠、どうだ、これを献上は。へへ、詰らねえもんだだけれど。」

と少し見せたくもあつて件のくだん 葎たばこ入いれを抜く。円輔は打返して捻ひねつて、

「罷まり間違あえば、手前にこのお腰こしのもの、ちよいと武士に二言はなしかね。」

「いや、江戸こッ児こだ。」と誰かの声こゝろ色いろで、判きつ然ぱりとなる。

「豪ごうい？」と大声で、ぴたりとお辞儀しげいをした、円輔は驚おどいて顔を上げる。

二階にがいから蝶吉てつきちの声で、

「富ふうちゃん！ 富ふうちゃん。」

犬張子

三十九

「はあい。」と引張ひっぱつて返事へんじをして、雛おしやく妓くは膳ぜんを摺すらして立ち、段階だんばし子ごの下で顔を傾

けて、可愛こゝろらしく、

「何なに、姐ねえさん。」

「あのね、私は今夜塩梅が悪いから、どこから懸つて来てもお座敷は皆断つて下さいな、そして姐さんがお帰りだったら済みませんがお先へ臥りましたッてね。」

「はい。」

「可い可い。」

蝶吉は、帰るとその時まで何をすることもなく可厭な心持で、箆笥の前にぼんやり立っていたのであった。

雛妓に言付けて、座敷を斜に切つて、上口から箆笥の前へ引返すと、一番目の抽斗が半ば開いていた。蝶吉は衝と立つて、

「おやおや、私が開けたのか知ら、」

と思ひ寄らず呟いた。抽斗には、神月の写真をいつも立て掛けておくのである。

ふつつり切られてしまつてからは、人は見なくつても、神月は知らないことでも、蝶吉は何となく、その写真を見ることさえ、我身で儘ならぬようで儂いので、あえて、今は仇なれと、思ふ思の増すのが辛さに、佛を見まいとするのでない、身に過失があつて、縁切つたと言われた人の、たといその姿でも、見てはならないようにされたごとく感じている。

抽斗の縁に手を掛けて、猶ためら予いながら、伸上るようにして恐こわいもののように差さ覗のぞこうとして目を塞ふさいだ。がツくり支えるように抽斗を差し懸けて、ああこの写真から下げて来ちや旨おいしいものを食べたつくと、耐たまらなくなつて、此方こなたを向くと、背中できんと閉しまツた途端に、魂を抜去られたか、我にもあらず、両手で顔を隠して、俯うつむ向いて、そのまま泣いていた。

しばらくして、蘇よみがえ生なつたもののように、顔を上げる。

向の隅に、雛ひなの屏風びょうぶの、小さな二枚折の蔭から、友染の搔卷かいまきの裾すそが洩もれて、灯ともに風も当たらず寂莫せきばくとしてももの寂しく華美はでな死体が臥ねているのは、蝶吉かかずが冊かく人形である。

搔卷はいつも神月と添寝した五所車ごしよぐるまを染めた長襦袢ながじゆばんを裁たつたのに、紅絹もみの裏を附けて、藤色縮緬ちりめんの裾すそ廻まわし、綿も新しいのをふツかりと入れて、天鵝絨びろうとの襟を掛けて、黄八丈の蒲団ふとんを二枚。畳を六ツに仕切つたほどの処へ、その屏風、その枕、小さく揃えて寝かした上の、天井には犬張子いぬはりこの、見事大きなのが四足よつあしをぶら下げて動きもせず、一体遣りやツ放しのお侠きやんで、自転車に乗りたがっても、人形などは持つてもみようと思わぬ質たちであったのが、児こを墮おろしたために神月との縁が切れて、因果を含められた時始めて罪を知つて、言われたことを得心してから、縁なればこそ折角腹に宿つたものを、闇やみから闇へ遣つた児

に、やがて追いついて手を引くまで、訛わびをする気でこうしている。あたかも活いきたるものを愛するごとく、起きると着物を着き更かえさせる。抱いて風かざぐるま車を見せるやら、懐ふところ中へ入れて小さな乳を押し付けるやら、枕を並ならべて寝てみるやら、余所目よそめにはまるで狂きちがい気。

四十

「ああ、天窓あたまが重い、胸が痛い、体中がふらふらする、もう寝ようや、」

蝶吉は枕を並ならべて、着たまま横になつて裾すそを伸ばして、爪つまさき先を包くるんだが、玉のような腕かひなを人形の搔かいまき卷の上へ投げ掛けて、ぴつたり寄つて頬を差寄せ、

「坊や、ちよいと、どうしたの、お母つかちゃんは何いけなくつてよ、すっかりお花を引いて負けて来たわ。二晩ちつとも寝ないんだもの、天窓が割れるようなの、悪いわねえ、穴蔵あなぐらン中でお前、六人一座でさ、灯あかりは点つけ通しだし、息が苦しくなると、そこらへ酢を打つよ。私わたいはもう死ぬようだ。お前のお父とつちゃんに叱なられてから、お花なんぞ引くまいと思つて、水も沸わかしたんでなくツちや飲まないでいたけれども、お母つかちゃんはお暇いとまが出たんですもの、体を大事にしたつて詰つまらなくなつてよ。だから、最初はじめツから、お前さんに棄あてられると、

私はどうなるか知れないって、始終いつていたのにさ、打遣つてしまつてさ、そして軽私はどうなるか知れないって、始終いつていたのにさ、打遣つてしまつてさ、そして軽
 怒なことをするなッて言つてくれたつて私は知りません。天窓へぴんと来るような五円
 花でも引かなくツちやあ、自分で生きてるのか何だか分らないもの。

だけでもねえ、身でも投げて死んじまうと、さも面当にしたようで、どんなに心配を
 懸けるか知れないし、愛想を尽かされると、死んでからも添われないと悪いから。何も私
 を厭なんじやない、世間の義理だからつて言うんだけれども、何だか自分勝手のようだわ
 ねえ。

どうせ早く死にたいんだから、何だつて、構やしない。坊や、お前でも生きてるなら可
 いけれど、目ぼツかりぱちぱちしていて、何にも言わないんだもの、張合も何にもあり
 やしない。私も死んじまつたら、死んだものと、死んだものとだから、お前も口を利くだ
 ろう。少しも分らないでした事だから、堪忍することはするツて、お父ちゃんもそうお言
 いだから、坊や、お前も酷いことをされて、鬼とも蛇とも思つてようけれど、堪忍して、
 母ちやんと言つて頂戴な。」

と摺着いたが、がツくり仰向き、薄い燈火に手を翳して見た。

「おやおや、瘦せたわねえ。徹夜をして、湯にも何にも入らないから、黒くなつたよ、

段々瘦せて消えれば可いな。」

と袖口を掴んで肩の辺まで、撫で下げると、上へ伸ばしていた着物は翻つて、二の腕もあらわになつた。柔肌に食い入るばかり、金金具で留めた天鵝絨の腕守、内証で神月の頭字一字、神というのが彫つてある。

蝶吉は清しい目をぱつちりと睜つて、恍惚となつたが、枕を上げると突然忘れたように食い付いた。腕守を噛んで、頭を振つて、髪を揺ぶり、

「厭よ、私厭よ、別れるのは厭、厭！ 厭だ、厭だ、別れるのは厭。」と、泣吃逆をして、身を顫わし、

「写真くらい見たつて、可いじやないかね、可けないかい、ええ、構うもんか。私はもう、」

むツくり起上ろうとすると、茫然犬張子が目に着いた。

「はッ、」という溜息で、またぼつたり枕に就いたが、舌打をして、

「寝ツちまえ！」

と縫り寄り、

「私も端の方へ入つてよ、坊や、さあ、お乳。」

といつて、見得もなく、懐を搔開かいあけて、ふっくり白いのを持ち添えて、と見ると、人形の顔はふツと消えて無かつたのである。

胸騒

四十一

「おや、おかしいねえ、」と吃驚びつくりして吃きつとなつたが、蝶吉は出がけに人形の顔を搔卷かいまきの襟で隠しておいたのに気が付いた。

「まあ、さつきから顔が見えたようだつけ、それじゃあ、倂おもかげだつたかしら。」

思ぞつわず悚然ぞつとして、あたりを見たが、莞爾にっこりして、

「ちよいと、肖にていると思うもんだから、お前は生意気だね。」といつて搔卷の上を軽く叩くと、ふわりと手が沈こたえんで応がない。

「あれ、」とばかりで、考えたが、そツと襟を取つて、恐々こわこわ搔卷を上げて見ると、牡丹ぼたん

のように裏が返った、敷蒲団との間には、紙一枚も無いのである。

蝶吉は我知らず、

「富ちゃん、」と声を立てて、真直に跳起きた。

「はてな、」机に凭りかかった胸を正しく、読んでた雨月物語から目を放して、座の一方を見たのは、谷中瑞林寺の一間に寓する、学士神月梓である。

衣帯正しく端然として膝に手を支いて熟とももの思いに沈んだが、借ものの経机を傍に引着けてある上から、そのむかしながし殿の庭にあつた梅の古木で刻んだという、渠が愛玩の香合を取つて、一捻して、

「こんなこつちやあ可かん。」と自から窘めるがごとく呟いて、洋燈を見て、再び机に向つた時、室が広いので灯も届かず、薄暗い古襖の外に咳く声して、

「先生、御勉強じやな、」といいながら静かに入つたのは、院の住職律師雲岳である。学士の前に一揖して、

「お邪魔を。実はまた一石願おうかと思つて、参つたがな、御音読中でござつたで、暫時あれへ控えておりました。何を御覧なさるか、結構なことじゃ。襖越ではござるし、途切れ途切れで文章はよく聞取りませぬが、不思議に先生、今夜の貴方の御声というものは、

実に白蓮の花に露が転ぶというのか、こうその溪川の水へ月が、映ると申そうか、いかにも譬えようのない、清い、澄んだ、冴々した、そういたして何か聞いている者まですが、引入れられますような、心細い情ないといったように、自然とうら悲しくなりましたが、一体お読みなされたのは。」と思入った風情である。

梓は卜胸を突いた様子で、

「希代なことがあるんですよ、お上人、読んでいましたのは御存じの雨月なんです、私もなぜか自分の声に聞き惚れるほど、時々ぞつぞつとしちやあその度に美しい冷い水をひとしずく
 一 雫 ずつ飲むようで、唾が涼しいんです。近頃はこういうものか、ものを言うにさえ、唾がねばって、舌がぬめぬめして心地の悪さといったらなかつたんですが、まあ、体が半分水になって、それが解けて行くようで、月の雫で洗ったようです。それでいて爽かな可い心持かと思うと、そうじゃない、ここん処が。」といいかけて、梓はうら寒げに、冷たい衣の上から胸を压えた、人にも逢わず引籠って、二月余、色はますます白く、目はますます涼しく、唇の色はいやが上に赤く、髪はやや延びたが、艶を増して、品好く瘦ぎすな倅は、見るともの凄いいほどである。

「胸騒ッていうんでしよう。」

鶯

四十二

「痛いのかと思うとそうでもなしに、むず痒い、頼ない、もので圧えつけると動気が跳る様で切なくツて可けません。熟としていれば倒れそうになるんですもの、それを紛らそうといつになく、声を出して読み出したんですが、自分で凄くなるように、仰有れば成程良い声というんでしょうか。」

「なかなか、幽冥に通じて、餓鬼畜生まで耳を傾けて微妙の音楽を聞くという音調だ、妙なことがあるものでございますな、そして、やはりお心持は。」

「憑物でも放れて行つたように思うんですが、こりや何なんでしょう、いずれその事に就いてでしょうよ、」と微妙に笑を含んで、神月は可愧しげに上人が白き鬚ある棗のごとき面を見た。

「どうしても思い切れなかつたんです、実は……。」

ここに梓まちびとが待まち人びと、辻つじ占うら、畳たたみ算ざん、夢ゆめの占うらなどないいう迷信まじんの盛さかな人んの中に生なれもし育そだちもし、且かつつ教しよえられもしたことを予あめ断かつておかねばならぬ。

はじめ蝶かた吉かたと歌枕うたまくらで逢あいびき、曳ひの重おもなる時分ときわ、神月かみづきは玉たま司し爵しやくの婿むこ君きみであつたから、一いつてき千金せんはその難かたしとせざる処ところ、蝶かた吉かたが身みを苦くる界がいから救すくうのはあえて困難くわんな事ことではなかつた。

もつとも他ひとと違ちがひ、神月かみづきは、己おのれが既往こじやうの経きやう歴れきに徴しゆして、花街はなまちにあるもの、かえつて、実まことがあつて、深切しんせつで、情なさけを解として、殊ことごとに一種いんぎ任よ、侠ぎやくの氣きを帯おびてゐることを知しつてはい

たが、さすがに清きよい、美しい体ていのものだとは思おもわれない。そのほとんど、掌たなにも、額ぬかにも、悪わる汗あせ一いっツ搔かいたことのない、黒くろ子こも擦こ傷がの痕あともない、玉たまのごとき身みを投なじて、これが歌

枕まくらの一いっ室しつに、蝶かた吉かたと衾ふすまを同おなじゆうする時は、さばかり愛あい隣りんの情なさけは燃もえながら、火中かちゆう一条いっの冷れい竜りゆうあつて身みを守まもり、姍あだ姍よう窈ちゆう窕ようたる佳人かじんにも梓まの肌はだを汚けさしめず、幾いく分ぶんの間隙ま隙きを枕まくらの間

に置おいたのであるが、一朝あるあさ、蝶かた吉かたはふツと目めを覚さめて、現いまの梓まを揺ゆ起おこして、吃び驚びっくりしたようにあたりを見ながら、夢ゆめに、菖蒲あやめの花はなを三さん本ぼん、荅たなるを手に提ひげて、暗くらい処ところに立たつて

ると、明あかくなつて、太陽たいやうが射さした。黄金くわんごんのようなその光線ひかりを浴あびると、見る見る三輪さんりんともばつと咲さいた、なぜでしょう、といつて、仇あいげなく聞きかれた。梓まはあたかも悪夢あくむに襲おわれ

て、幻の苦患くげんを嘗なめていた、冷汗もまだ止とまらなかつたくらいの処へ、この夢を話されて、面おもてを赤かするまで心に恥じた、あわれ泥中のこの白はき蓮はちすに比ひして、我が心かえつて汚けがれたりと、学士はしみじみ蝶吉の清い心を知つた。

その時と、いま一度は、蝶吉がしかるべき軍人の一座の客に呼ばれたが、言うことが癩しやくに障さつた上に、酔つて懐の玉を探ろうとしたので、癩かんしゃく癩くを起してその横よこ顔つらを平手なぐで撲なぐると、虎鬚とらひげを逆さかにして張飛ちようひのように腹を立て、ひいひい泣入る横腹を蹴けつけたばかりでは合点せず、その日の主人役が客に濟すまずとあつて、死しんだものようになつてゐるのを引起し、二人両手を取つて、小刀ナイフで前髪を切つて、座敷をつツ立たつた。居合した朋輩も、女中も、駟かけあが上あがつた若い者も、顫ふるえるばかりで、取とりおさえ手もなかつたといつて、梓すに顫ふる着くいて口惜くやしがつた時には、耐たまらずその場から車に乗せて、これをわが園そのへ移し植うえようと思つたのである。

四十三

もとよりその時には限らない、女は迷惑を懸けようとはしないで、一生芸妓げいしやをしてい

るから、変らず見棄てないでさえくれれば可いというのだけれども、いうがごとく、聞か
 がごとく、はたそれ見るがごとき気性の女、梓は心の動くごとに勤を落籍そうと思わぬこ
 とはなかつたが、渠が感情の上に、先天的一種の迷信を持つてるといふはこのこと。

一体、天神様の境内で、恩を謝す心を決して以来、その機会がなかつた処、翌年一月、
 伊予紋で、大学出の人の新年会があつた。一座の中に蝶吉が居た。また一座の中に、下宿
 の二階に住んで六畳の半ばを蔽う白熊の毛皮を敷いて、ぞろりと着流して坐りながら、下
 谷の地を操縦する、神機軍師朱武あつて、疾より秘計を囿らし、兵を伏せて置いたれば、
 酒半ばにして哄と矢叫の声を立てて、突然梓の黒斜子に五ツ紋の羽織を奪つて、こ
 れを蝶吉の肩に被せた。嬉しい！と手を通して出の三枚襲の上へ羽織ると斉しく引
 緊めて、裾を引いたまますつと出て座敷を消えると、色男梓君のために、健康を祝してピ
 ールの満を引くもの数をしらす。梓は丸腰の着流し、あたかもお館の法度を犯して裏庭か
 ら御台のお情で落ちて行くように、腕車で歌枕に送られたが、後を知らず、顔色も悪く未
 明に起きると、帯を取つて、小取廻に尖を渡して、本式に畳んで置いた袴の腰板を取つ
 てあてがい、着たまま枕頭に坐つて介抱していた蝶吉が件の羽織を惜そうに脱いで被
 せた。人肌のぬくみも去らず、身に染みだ移香をそのまま、梓は邸に帰つて、ずつと通

ると、居間の中には女交りにわやわや人声。明けて入るのを、小間使が、あれといって、手を突く間もなく、一人が背後からぴつたり閉めた。兩戸は半開のまま、朝がけの軍に狼狽えたような形。払を持つやら、箒やら、団扇を翳しているものやら、どこに透があつて立ち込んだか、鶯がお居間の中に、あれあれという。鴨居から飛んで、到来ものを飾つた雪の積つたような満開の梅の盆栽の枝に留つたのを、逃がすなど箒を突出すから、梓は引留めながら件の羽織を脱いで、はらりと投げたのが、中に鶯を包んで落ちた。

手を入れて労り取つて、二十四の梓は嬉しそうに、縁側を伝つて夫人童子の寢室に入つて、寢台の枕頭に押着けて、呼起して、黄鳥を手柄そうに見せると、冷やかに一目見たばかり。

(私はまだ起きる時間ではございません。)と背後も向かず自若として目を瞑つた。その時も梓は顔の色を変えたのであるが、争うこともせず。

(失礼、)といつてずつと出て、廊下に立ちながら籠を命じ、持って来る間を、手では、と懐に入れながら、見霽の湯島の空を眺めている内、いかなる名鳥か嚶々として、三度、梓の胸に鳴いたのである。

が、籠が来て懐から出そうとすると、羽ばたきもしないので、早や馴れたかと思うと、

あわれ、翼をちぢめて目を落していたのである。蔭絵の鳥籠に、件の盆栽の梅を添えて、わざわざ葬らせに使を出した。以来心に懸つて、蝶吉を落籍そうと思うたびに、さることあらじと知りながら、幼い時からの感情で、羽織の同一のが兆をなして、恐らく、我が手に彼を救うてこれを掌中の玉とせんか、時を措かず砕けるのである。日もあらず煩いでもするのであろう、むしろ、生命が長くあるまい、と思う念に制せられて、その寿を欲するために、常に躊躇していたのであつたが。

四十四

「……一旦縁を切つてしまつた上では、私が心持にも、また世間の義理にも、疚しいこととはないんですから、それが未練というんでしょう。そのうち玉司へ行つて、表向縁を切りかたがた、あの男は手切を取ると言われても構わない。芸妓を落籍せると隠さずについて、金子を取つて、それで、勿論二度とかかりあいはいはしない意じゃありませんがね、苦界だけは救つて素人にしてやろうと、お上人、可愧いんですが言います。実はそれを心楽みにして、幾分かまだまるつきり離れてしまわないような気で、当分逢わないだけだと

いうような心持でおつたんです。

先刻私さつきを尋ねて来た、品の可いい老女があつたでしよう。彼は玉司に昔から勤めている取とりしまりで、何十年にも奥からは出た事がない、まだ鉄道はどんなものだか知らない女で、童子の乳母なんです、実はその用で参つたんで、私にまた帰れていいいます。それとはあんな御気性だから、怪我けがにも仰おっしや有りはしないけれども、何をいったって、初めて男を知つたお姫様だ。貴方あなたが内を出てからは、鬱うつうつ々として人にもお逢いなさらない。

医者は神経衰弱だというそうですが、不眠性に罹かかつて、三日も四日も、七日ばかり一目もお寝やすみなさらない事がある。悩みが一ひと通とじやない。この間もうとうとしかけた処へ、縁側を通つた腰元が登あしおと音を立たてて、それがために目が覚めたといつて腹を立たつて、小刀ナイフを投付けて、もうちつとで腰元の胸を突こうとしました。

この頃じや、まるで一室ひとまの外へも出て来ないような始末。見かけはどんなでもよくよく心を知つてるのは、乳母だから、私に帰れ。

承れば大分御謹慎で、すっかりお品行みもちも治つたそうだって、そういうことでございました。

随分片意地な老女が、我がを折つていましたから嘘じやありませんまい。

成程それではあんな夫人ひとでも私をそれまでに思ってくれるのが解わかりましたが、こうなつた上のこと。

謹慎をしているのは、あえて辛抱を見せて、玉司の家に帰りたいためではないから、断然、これツきりだと思つてくれ、私の引籠ひきこもつて身を責めているのは、ただ先祖に対して済まないと思うからだ。

ときつぱりいつて帰しましたよ。」

「ふう、」と上人は頷うなずいて、じつと考え、

「いや、段々お心が静まつて来て、好よい御返事をなされた、結構じゃ。」といいかけて、梓のものの寂しげなる顔を見て、

「それでさつぱりとなされたかな。」

「ええ、さつぱりしたそのせいだろうと思ふんです。まだ、金の蔓つるがあつて、一式のことに落籍ひかして素人にしてやろうと、内々思つてました内は、何かしら心の底あつたまりに温あつたまりがあつたのを、断然、使つかを帰した上、夫人の心も知れて見れば、いかに棄身すてみになつた処で、無心などいえたものじゃあない。そうすりやお蝶の方も、もうあれツきり、ふツつり切れた、私はこちら孤はなれじま島しまに独り残されたようで心細い、胸むな騒さわぎのするのはそのために違いないんで

す、お可愧いね、」といった清らかなる学士の笑顔はうら寂しい。

「ははあ、いや、お若い中また余り悟り澄さないのも宜しかろう。たんと迷わつしやるも面白い。」とこの人こそ悟り切つたらしいことをいって、呵々と笑つて、行きがけに大音で、「誰ぞ先生に茶を上げい。」

梓はまた机に向つたが、木の角では、心の跳るのが押え切れず、胸騒がする、気が鬱ぐ、もう引入れられそうで耐えられなくなつて、香の薫に染みた不断着をそのまま、かかる時、梓が行くのは必ず湯島。

白木の箱

四十五

「富ちゃん、ちよいと、富ちゃん、私の人形を知らなくツて、」

あたふた狼狽えたようなものの氣勢、癩癩交りに呼んだのは蝶吉である。

「一件だ、」と、これを聞いてかねて心得たもののごとく、源次は傍に目配せした。

「来ましたね。」と低声でいって、訳もなく天窓を叩いて竦んだが、円輔は、えへん！
声 繕をして二階に向い、

「お蝶さん、何ですか、人形。人形どころかい、そこどころじゃあない、大変なことがあります、ちよいと大したこった、豪いこったよ。」

「何、」と切つて棄てたような、つつけんどんなもの言いである。

「まあさ、ちよいとおいでなさいていこった、こったの性なら下まで来いだよ。」

「富ちゃん、富ちゃんてば。」

蝶吉は取合ずに、雛妓ばかり呼立てる。

「まあおいでなさいつていうのに、何ですぞ、ちよいと、大変なこった、お蝶さん、神月の旦那から、」

「ええ、」

「それ見ねえ、」と源次がちよいと突いて、にやりと笑うと、円輔は大乗地で、

「旦那から、もし小包郵便が来たんですぞ。」

「ええ。」

「神月さんからお届けものだ。」と源次も傍そばから口を添える。

「知りませんよ。」と邪険には言つたけれども、そのうち自ら和おのずからのある、音色ねいろを下で聞きききす澄まして、

「御存じの筈はずですが、神月さんといやあお前さん、」

「可いいよ。」

「宜よろしくばお止めやになさいまし。」と大いに澄し、顔を見合せて黙だんまりとなつた。

「富ちゃん、」

「そら、また富ちゃんだ。」といつて円輔は、敷居の処まで来て立っている雛妓ひなこを見て屹きつと目で知らせた。

「私わたいは知らないの。」

しばらくして、声も優しく、

「いいえ、小包こぶちさあ、」

「本当だつてば、何を疑うたがうんだな。」と源次は大真面目まじめでいる。

「嘘うそばツかり、」といいながら、ちよいとためらつた様子であつたが、階はしご子段だんがトんと鳴なつた。

下から仰山に遮つて、

「ちよいとお待ちなさい、お蝶さん、請取うけとりがいりませ、いらつしやるなら、どうぞ、御懷中物を御持参で、」

「宜しい、」と男らしく派手に爽さわやかにいった。これを機掛きつかけに、蝶吉は人形と添寝をして少し取乱したまま、しどけなく、乱調子に三階から下りて来て、突いきなり然、

「どこにさ、」と嬰あかんぼ児の強請ねだるようにいいながら、人前を澄した顔。

「気が疾はやいな、どうも、師匠出してやりたまえ。」

「まずお受取を頂戴いたしたいような訳で。」

「すツかり負けて来たんですからたんとはなくツてよ。」

「豪い！」といいさま、小紋縮緬こもんちりめんで裏うらが緞子どんす、同く薄ツペらな羽織ひらをひらりと撥はねて、お納戸地の帯にぐいとさした扇子を抜いて、とんと置くと、ずっと寄つて、紙幣を請取り、

「何にいたしましたしょうな。」

源次は取片附けて、

「まあ、師匠。」

「じゃあちよいと升どん。」

「おやおや、大倭^{やまとや}家内松山峰子様行と書いてあるねえ。」

「峰子様、よッ。」と懸^{かけこえ}声をするは円輔なり。

「可^よくツてよ、」と可愧^{はずか}しそうに、打返してまた裏を見た。

「神月より、……おや、平時^{いづも}の字と違ってやしなくツて?……何だか手が違つてるようだねえ。」

あえて疑うというではないが、まさかと思う心から人にも、確めてもらいたいので、わざと不審^{いぶかし}げに呟^{つぶや}いた。

「わざと手を替えてお書きなさいましたあね、そりや、お前さん。」と婆々は極めて鹿^し爪^{かづめ}らしい。

「そうねえ、何だか包が大きいわねえ、何だしら。」

玉手箱という形で両手に据えながら目を瞑^{ねむ}る。

「何でげしよう。」

「何だか、」

「そうさね。」

「一番あてツこで、丁^{ちよう}と出たらまた頂戴は、どうでげすえ。」

源次は鷹揚おうように、

「下司張げすばるな下司張げすばるな。」

「どうせ詰つまらないものよ。」と蝶吉は笑いたそうにして押耐おしこらえる。

円輔は例に因つて、

「よッ！」

「沢山おひやらかして下さいな。」と怒つたのでも何でもない、いそいそ膝の上へ抱下だきおろして斜ななめにした。

蝶吉は簪かんざしを抜いて、そつと持つて、

「邪険まなごに封まなごをしてき。」といいいい、名工が苦心まなごの眼まなこで、瞞みつめて、簪ささきの尖さきで、封まなごじ目を切つて解ほどく。

上包はくるくると開あいて、やまと新聞の一の面まが颯さつと膝の上に広がった。中は、中は、手文庫てもんくばかりの白木の箱。

「さあさあ御覧ごらんじろ、封とけが解とけるに従したがうて、お蝶さんの、あの顔が段々ゆる弛ゆるんで来る処を、」

「どういふ訳わけだか、不思議なもんさね、」と源次郎は憎にく体ていな。

「私わたい沢山だ。」

「何もお前さんそんなにつんとすることはないじゃありませんか、頬を膨らしてさ。」

「一生懸命でおいで遊ばす、さあ、耐^{たま}らない。ほれ、」

「それ笑った。」

蝶吉は莞爾^{にっこり}して、

「御免なさい、」というかと思うと、引攫^{ひっさら}うように小包を取って、裳^{もすそ}を蹴返すと二階へ、
ふい。

驚いたのは円輔である。ぐんにやりとなつて、

「豪^{えら}い！」

四十七

「堪忍なさいな、私^{わたい}は見向いても下さらないんだと思つて、自暴^{やけ}よ、お花札^{はな}なんか引いてさ、堪忍して下さいな、可^よくツて。おまえ様^{さん}の深切を無にしたようだけれど、だつてしようがないんだもの。これからきつと大人しくしますから。いつけた通^{とお}りに思つていらつしやるんだよ。悪かつたわねえ。それでも開けても可^よくツて。嬉しいなあ、」と

胸を抱しめて身を顫わした。この音信があつたので、許されたもののように思われて、蝶吉は二階に上ると、まずその神月の写真を懐に抱いたのであつた。

それでも箱の中が気に懸つて、そわそわして手も震い、動悸の躍るのを忘れるばかり、写真で圧えて、一生懸命になつて蓋を開けた。

箱の中には紙にも包まず裸の人形が入っている。

ふつと見て少し色を変えて、

「おやおや、おかしいねえ、あてっこすりに寄越したのかしら、私をこんなにしておいて、まだそんなことをする方じゃあない、」とこの時気が付いたのは、自分の人形のことである。

蝶吉は夢のような心持がして、気味悪そうに、灯の暗い、森として、片附いた美しい二階の座敷をしたが、そうだ、小包が神月からというのに顛倒して忘れていた、先刻を思出すと、悚として、ばたりと箱を落して立ち、何を憚るともなく、浮足で、密と寄つて、蒲団を上げて見ると何にもない。思切つて、白い手を冷い小さな闇の中に差入れると、丹精をして着せておく、筒袖の着物に襦袢、縮緬の書生帯まで引くるめて、円げてあつた。蝶吉は、呼吸を詰めて、唾を呑み、座に直つて、引寄せて、熟と見て蒼くなつた。涙

をはらはらと落して、震い着いて、

「坊や、」とばかり、あわれな裸はだかみ身を抱え上げようとして、その乳のあたりを手に取る
と、首が抜けて、手足がばらばら。胴どうなか中の丸いものばかり蝶吉の手に残ったので、

「厭いや！」と声を上げざまに、蛇を掴つかんだと思つて、どんと投げると、空を切つて、姿見に
映つて落ちた。

「あれえ。」

下階したでは哄どつと笑う声、円輔は屹ぎつと見得をして、

「今いまのは確たしかに、」

「叱しつ！」と押えて源次はしてやったという顔色かおつき。

「雲井の印紙を引剥ひっぺがして、張り付けて、筆で消印を押ししたお手際なんざあ、」

「どんなもんだい。」

「いや、御馳走様でございますよ。」

「口惜くやしい！」と泣く声が細く耳を貫いて響いたが。

下じめの端を両手できりきりとメ《し》めながら、蹠よろめ跟ねいて二階を下りて来た、蝶吉の
血相は変つている。

顔も蒼白く、目が逆釣り、口許も上に反ったように歯を噛んで、驚いて見る下地ツ子の小さな手を碎けよと掴んでぐツと引着けた。

「あれ、姐さん。」

「さあ、言つとくれ、言つとくれ、承知しなくツてよ、私の、私の人形をあんなにしたなあ誰だ。いいえ、知らないツたつて不可い、あんなにお前さんにも頼んでおくものを、……」と力を籠めておさえるようにいったが、ぶるぶる震える、額には筋が通った。

「手も足もばらばらよ、酷いツたら、酷いことよ。さあ、誰だか、いつておしまい、いえ、聞かしておくれ。蔭になり日向になり、しよつちゆう庇つてやる姐さんだ、お聞かせなね、ええ！ 畜生言わないかい。」

「痛い、痛い、姐さん。」とベソを搔いてたのがわつと泣出した。

灰神楽

四十八

「ま、ま、お前さん何でございます、手荒なことを。」と婆は居合腰に伸上つて、袂を取つて分けようとするのを、身悶して振払い、振向いて屹と見て、

「お婆さん、お前にも私は怨があつてよ、可い加減なことをいって誑してき、お肚が痛むか擦ろうなんぞツて言つておくれだから、深切な人だと思つたわ、悔しいじゃあないかね。畜生、放せ、何をするのよう。」

「おや、恐い、恐いこつた。へん、」と太々しい。血眼でもう武者振附そうだから、飽氣に取られていた円輔が割つて入つた。

「さてはや、」

「ええ、手前達の手を触る体じやあないんだい、御亭主が着いてるよ、野幫間め、」と平手で横顔をぴたりと当てる。

天窓を抱えて、

「豪い、」と屹驚。

「亭主持が凄じいや、向から切られた癖に、何だ、取揚婆のさかさまめ、」まさかにかうとは思ひ懸けず、いやがらせをやつて、黝つて奢らせた上、笑い着けて、下駄の肚癒を

して、それから、仲直りをして、ちよいと悪党な処を見せて、そこらで思い着かれようという際限のない大慾張おおよくはり、源次は源次だけの考かんがえで、既に今夜印半纏しるしばんてんで、いなくて反身そりみの始末であつたが、悪戯わるさも、人形の手足をいでおいたのに極きわまつて、蝶吉の血相の容易やすみでなく、尋常ただでは納りおさまりでもない光景を見て、居合おそれすは恐おそれと、立際たちぎわの悪体にくてい口、

「ざまあ見やがれ、」とふてを吐ついて、忘れずにたばこいれ 蓑入おそれを取とつて差し、生なまつちろ白しろい足を大跨おおまたにふいと立つて出ようとする。

「待ちやあがれ。」

「ええ、」

「悪戯いたずらをしたなあ、源の野郎、手前てめえだな。」

「いいえ、私だ。」とすつきりいつて、ズツと入いつたのは大和屋の姐ねえさんで、蔦吉つたきちという中年増ちゆうどしま。腕も器量すしも凄すごいのが、唐とう棧げんづくめのいなせな形なりで、暴風雨あらしに屋根を取とられたような人立ひとたちのする我家の帳場ひとわりみまわを、一渡ひとわりみまわしながら、悠々として、長火鉢ながひばちの向側むかひ、これがその座に敷敷いてある、黒天鵝絨くろびろうどの大座蒲団おほいざぼたんにきちんと坐まつて、「寒い。」と肩を一ひとつ揺ゆつておいて、

「皆静みんなずかにしておくれ、お蝶さんお前もおすわり。」

「何ですツて、」と蝶吉は目を据えて立つたまま、主婦が方に向直つて、

「悪戯をしたなあ、お前さん、」と屹という。

「あい、私さ、」

「何、」

「突立つて、何だ。」

「坐つたらどうおしだい。」

「おやおや、この女は、目が上つてるよ、水でもぶツかけておやんなね。」

「まあ、姐さん、」とばかりで円輔は遣瀬がない。

「お蝶私は主人だよ。」

「は、私、お前さんの抱妓じやありません、誰が、そんな水臭い、分らない奴に抱えられるもんか。人が知らないと思つてさ、薬を飲ませてさ、そのせいで、私逢えないんじやありませんか、命もいらぬ人よ。あんまり思遣がない、何が氣に入らないで、人形を壊したのよ、よ。お前さんは悪いことを、よく知つて私に教えてさ、無理にあんなことをさせておいて、まだ足りなくツて。畜生！ 義理知らず、お前さんの出は田舎じやあないか、私はね、仲之町で育つたんです。」と蝶吉は急ぎ上げて言うこともしどろである。

四十九

「黙れ、黙れ、黙れ、ええ黙らないかい。」といいさま持つてた長煙管で蝶吉の肩をびしと打った。

「畜生！」

「生意気な、文句をいうなら借金を突いて懸るこつた、分が何だい、憚ンながら大金が懸つてますよ。そうさ、また仲之町でお育ち遊ばしたあなただから、分外なお金子を貸した訳さ。しつ越もない癖に、情人なんぞ拵えて、何だい、孕むなんて不景気な、そんな体は難産と極つてるから、血だらけになつて死なないうようにとお慈悲で墮してやったんだ。商売にも障ります、こつちや何も慰に置くお前じやあない、お姫様も可い加減にしてお可いや、狂気。朝から晩まで人形いじくりをし通されて耐るもんか、外の妓にも障るんです、五人六人と雑魚寝をする二階にあんなもの出放しにしておかれちゃ邪魔にもなるね。面も生ツ白いし、芸も出来て、ちつたあ売れるからと大目に見て、我ままをさしておきやあ附け上つて、何だと、畜生。もう一度いつて見ろ、言わなきやあ言わしてやろうか、」

と乗上つて火鉢越に、またその頸のあたりを強く打つたのである。

「神月さん！」と蝶吉は半狂乱で悲鳴を上げる。

「まあさ、まあさ、姉さん。」と円輔は手持不沙汰なのを頻に揉む。

「一体口が過ぎるんですよ。」と婆はねツつり。

「いいえ、たまにやこんな目に逢わせておかないとね、いい気になってつけ上りまさあね。神月さんがどうした、向うから突出された癖に何だい、器量の悪さツたらありやしな、呼べるなら呼んで見るが可いや。」

「ええ、呼ばなくツて、」と泣々いいながら、立とうとするのを、婆がむずと掴まえた。

「お前さんは。」

蝶吉は弱々となつて崩折れて、

「悔しい、悔しい、悔しい、皆で私を、私をどうするのよ。どうせ死ぬんだから、さあ、殺しておしまいなさいなね、さあ、さあ、」と小供が捏々をいうごとく、横坐
 になつて、顔も体も水から上つたようにびツしより汗になりながら、投遣りに突かかる。

「殺して耐るもんか、大枚のお金子だあね、なあお婆さん。おほほほほほ。」

「さようでございますとも、ははははは、」と笑いつけてあえて不関焉。

真蒼まつさおになり、髪も乱れて、泣吃逆なきじやくりをしいしい、

「殺さなくツたつて可いいのよ、可いいのよ、厭いやなら止よせ、私わたいどうせ死ぬんだから。そして、あの皆神月みんなさんに言付いっつけてやるから覚えているが可い。私誰わたいも構わつちやあくれないんだもの、世間にやあ、鬼おにばツかり。」とはや血が狂まつたか舌も縛もつれて他愛がない。

「ええ、性根じやうこんをつけないかい！」と、力なく己おのれを捕とえた敵の腕かひな、婆の膝によりかかつて肩で息を吐ついている、胸の処ところを、また一つ煙管たばこで撲なぐつた。

途端つづに糸切齒いとぎりをきりりと鳴ならして、脱兎だつとのごとく、火鉢の鉄瓶てつびんを突つつかえ覆かすと、凄すさましい音がして※と立たつた灰神樂ばいじんがく、灯も暗く、あツという間に、蝶吉の姿はひらひらとして見えなくなる。

「待て、」と縛すがつて戸口で押えたのは源次であった。

物をも言わず、据すわつた瞳まなこで、じつと見るや、両手に持もつた駒下駄こまげを擲たすきに振ふつたので、片手は源次が横顔よこがほを打うつて退のぞけ、片手は磨硝子すりがらすの戸を一枚微塵みじんに碎くだいた、蝶吉は翻ひつて出でたと思うと、糸を曳ひくように颯さつと駈かける。

「こりや、待て。」

学士は胸騒がして、瑞林寺のその寓居に胸を圧えて坐するに忍びず、常にさる時は行いて時を消すのが例であつた湯島から、谷中に帰る途の暗がり、唐突に手を捕えたのは一名の年若き警官である。

梓は気も心も沈んでいたから少しも騒がず、もとより驚く仔細はない。静に顧みて、

「私、」

「どこへ行くか、あツ貴様は。」

言葉も荒く、ものに激しているようである。

「谷中の方へ行くんですが、」

「うむ、墓原へでも寝に行くか、嘘を吐け！ き様掬摸じやろう、」とほとんど狂人に齊しい譎言を言つたけれども、梓はよく人を見て、この年少巡査があえて我を誣いんとする念慮のあるのでもなく、また罪人を悪む情が烈しいのでもなく、単に職務に熱誠であるため、自ら抑うることの出来ない血気に逸るのであることを知つた。

「貴方御心配には及びません。」と微笑むばかりに涼しく答える。清らかなその面を見て

も、可懐しい香の薫の身に染みたのに聞いても、品位ある青年であることが分るのであろうに、警官は余り職務に熱心であつた。

「名を言え、番地はどこか。」

「……………」

「こらー！」と驚くべき声で罵り喚く。

あえて憚る処はないけれども、名告るは惜しい名であつた。神月はいい淀み、

「玉……月、」とばかり言葉が濁る、と聞免さず、

「玉……玉……玉何だ、」と畳みかけて尋問する。

「玉月、あ、秋太郎です。」といったが我にもあらず狼狽たのである。

「家は、」

「下宿して、」

「どこだ、何というか、うむ、疾く言わんか。」と急ぎ立てられて、トむねをついて猶予つて、悪いことをしたと思つた。

横顔を一拳、拉げよと撲りつけて、威丈高になつて、

「来い、」

蒲柳ほりゆうの公子は生れて以来、かばかりの恥辱を与えられたことをかつて覚えぬ。夜目にこそ見えね色なを作して、

「君！」

「馬鹿いえ、君たあ何か、」といいざまに横よこなぐり撲はたに払く手を、しつかと取ったが声も震えて、

「名を言おう。」

「何い。」

「神月梓というんだよ。」といいながら手を向うへ押遣おしやったが、吻ほっと息を吐ついて俯向うつむいた。学士はここで名乗った名なが太いたくも汚けがれたように感じたのである。

警官はこれを聞くと、その偽名を語ったゆえんを詰なじろうともせず、たちまち声こゑを和やわらげて、
「神月かね、」

「用があるんですか。」と、憤いきどおりはまだ消えず冷ひややかに答えた。

「さようか、何にしても交番まで、」といつて、巡査はその仔細を語った。

ちようど今しがた、根津の交番で、太いたく取乱した女おんなが一人掴つかまったが、神月という人ひとを尋ねるのだとばかりで、取留とりとめのないことを言っている。最初はじめその女が路みちを歩いている時背う

後しろから一人跟つけて来た男があつた、ということを通行人が告げたので、女は身装みなりの可い上いに、容色かたがたが抜群であるから、掬か摸かか、何ぞ悪意あつて尾行したものであろうという鑑定で、女を取調べる旁かたがたその悪漢の手当に巡行を命ぜられたものである。

語りかけて巡査は嘲あざけるがごとく梓あざを見て、

「ふむ、色狂いろきちがひ気の亭主ていしゅだな。」

星

五十一

しかり、||色狂いろきちがひ気の亭主ていしゅ||これを警官の口から聞くに至つて梓は絶望したのである。
されば冥土よみじを辿たどるような思いで、弥生町やよいちようを過ぎて根津まで行くと、夜更よふけで人立ひとたちはな
かつたが、交番の中に、蝶吉は、腕かひなそびらを背へ捻ねじられたまま、水を張つた手桶ておけにその横顔を押
着きけられて、ひいひい泣ないでいた。

帯を解いて下じめと共に卓子タイプルの上に縮わがねてあつた。この時まで嗜たしなんで持つていたか、懐中鏡やら鼈べつこう甲すかしぼりに透まきえ彫さしぐしの金蔀まきえ絵の挿櫛さしぐしやら、辺あたりに散ちらばつた懐紙の中には、見覚みおぼえのある縹つづれにしき縷錦の紙入も、落交おちまじつて狼藉ろうぜき極まる、蝶吉はあたかも手籠てごめにされたものごとく、三人懸ががりで身動きもさせない様子で、一人は柄杓ひしやくを取つて天窓あたまから水を浴びせておつた。黒髪も海松みるとなり、胸も裾すそも取乱して乳も露あらかになつて震えてゐる。

梓はがみは齒切はがみをして、衝つと寄つて、その行爲おこないを詰なつたが、これに答えた警官の語ことばは、極めて明瞭めいりやうに、且つ極めて正當なものであつた。

狂人きちがい力ちからで手に合あわらず、取静とめようとして引留ひきどめれば、主ぬしのある身体からだだ、指を指すなと、あばれ廻まわつて、簪かんざしを抜ぬいて突つこうとする。突つかれて手の甲きやうに傷きずけられたものも一名ある、ようよう掴つかまえてからも危険だから、腕うでは捻ねじ上げておかねばならぬ。且つその住所、姓名、身分てがかりの手懸てがかりを知るために、懐中物懐中物も検しらべねばならず、或あるはいかなる迫害あへを途上受けたかも計はかられないから、身内みうちを検しらべるには、着物も脱ぬがさなければならぬ、もちろん帯も解とかんけりや不可いけない。逆上のぼせて夥おびただ多たく鼻血はなぢを出ですから、手当てあてをして、今冷ひやしている処ところだといつた。学士がくしがここに來た時には、既にその道みちを行ゆく女おんなに尾行おしやうした男おとこというのが明あかに分わつていた。

交番の窓に頬杖を支いて、様子を見ている一名紋着を着た目の鋭いのがすなわちそれで、渠は学士に怨のある書生の身の果で、今は府下のある小新聞に探訪員たる紳士であった。

「やあ、神月。」

これにも答えず、もとより警官には返すべき言もなく、学士は見る目も可憐さに死んだものようになっていいる蝶吉を横ざまに膝に抱上げた。

「神月だ。」

思わず骨も砕くるばかり、しっかと縫って離れぬのを、賺かして、帯をしめさせて、胸を搔合せてやって、落散った駒下駄を穿かせて、手を引いて交番を出ようとする時、

「そら忘物だ、」といって投出して呉れたのは、年紀二十の自分の写真、大学の制服で、折革靴を脇挟んだのを受取って、角燈の灯の達かぬ、暗がりの中に消えてしまった。が、深更の大路に車の轆音が起って、都の一端をりんりんとして馳せ行く響、山下を抜けて広徳寺前へかかる時、合乗の泥除にその黒髪を敷くばかり、蝶吉は身を横に、顔を仰けにした上へ、梓は頬を重ねていた。その時は二人抱合っていたが、死骸は大川で別々。

男は顔を両手で隠して固く放さず、女は両手を下へ《したじめ》で鳩尾みずおちに巻きしめていた。

この死骸を葬る時、疾風一陣土砂を捲まいて、天暗く、都の半面が暗くなって、矢のごとき驟雨しゅううが注いだ。柩ひつぎは白日暗中を通ったが、寺に着く頃ころいには、拭ぬぐうがごとき蒼空あおぞらとなつた。

墓は、神月梓、松山峰子、と二ツならべて谷中の瑞林寺にある。

弔うものは、梓が生前の三個の信友と、いま一人、忍しのび々に音信おとずるる玉司子爵夫人童子であるが、姫は一夜、墓前において、ゆくりなく三人の学士にあつた時、哀あいを請うもののごとく、その自分がここに詣もつずることは、固く秘密を守つて世にあらわれぬよう、名にかけて誓われたといつて跪ひざまずいたのである。哲学者は直ちに靈前に合掌してこれを誓い、柳沢は卵塔うしろの背後に肅然として頷うなずいたが、一人竜田は、柳沢の胸にその紅顔を押当てて落涙かぶりしつつ頭ふを掉ふつた。星はその時煌きらめいたであらう。いかに、紫か、緑か、燦さんぜん然として。

明治三十二（一八九九）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第五卷」岩波書店

1940（昭和15）年3月30日

初出：「湯島詣」春陽堂

1899（明治32）年11月23日

※「鮓《すし》」と「鮓《すし》」、「飜」と「翻」の混在は、底本通りです。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湯島詣

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>